
Astral Record

姫月 銀牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A s t r a l R e c o r d

【Nコード】

N 5 4 0 5 M

【作者名】

姫月 銀牙

【あらすじ】

舞台は三十世紀末。惑星国家エディード連邦の分裂により地球は三つの勢力に別れ、第四次世界大戦が勃発した。そんな中どの勢力にも属さない極東の島国、ギアルシア企業国に暮らすガイアは父親の遺産である少女と出会う。それは世界を変える物語の始まりだった……
現実世界の未来を作者なりの予測と妄想により忠実に物語化したリアルにこだわったライトノベル系美少女SF小説です。（イラスト、資料、挿し絵もアップしていきます）

人物一覧 1 (前書き)

登場人物を解説付きでまとめてみました。

1があれば2もあるはず

SFなのでどうしても登場人物が膨大になってしまいます

あと兵器と用語の一覧も作る予定です。

設定とか一覧とかウザいって方はスルーしてください。

それと今後の展開が分かっってしまうような文もあるのでご注意を

人物一覧 1

白皇院 ガイア

Guire Byakuouin

種族 ホモ・エクシミウス

性別 男

出身 ギアルシア企業国 第十二階層・桜関

生年月日 西暦2982年6月25日

職業 桜関学園高等部生 フリーメイソン ギアルシア社会長及

びCEO

血液型 A型

瞳 エメラルドグリーン

髪 銀髪にルビー色のメッシュ

専用機 1/YU-Z20 ラグナロク

本編主人公。現在は片桐ガイアを名乗る。前ギアルシア企業国大統領の息子にしてアーレア帝国皇帝の孫。クイーンアイランドテロ事件の生存者。事件でテロリストに捕まり、太平洋海底にあるエディード連邦の秘密研究機関『アーク』に売り渡される。二年間研究機関で過ごし、強化人間となる。その後単独で機関から逃げ出し、北太平洋統合連盟の横浜郊外へ流れ着く。保護されたガイアは名門片桐家に引き取られ養子となった。現在は国籍が北太平洋統合連盟で、ギアルシアの桜関学園の留学生として扱われている。

レイア＝クロート

Leir Clotho

種族 上級サイバーヒューマノイド

性別 女(自称)

出身 ギアルシア企業国 第九階層・ヘヴンズロード

生年月日 西暦2576年11月8日

レベル 6

系統 F a t e s

瞳 自在変色 基本はシルバーブルー

髪 発光ピンクに発光ブルーのメッシュの長髪

専用機 1/YF-M22 ミラージュ

本編メインヒロイン。最高位の電脳生命体『F a t e s』の一体にしてガイアのパートナー。妹に当たるロシユネ「アトロポスと共に代々白皇院家当主に継承される。ガイアに継承された時はアツプデート中であつたため指輪状記憶端末内で眠り続けていた。見た目は少女だが一人称は『俺』。好物は糖度の高い人間の食べ物。あらゆる機械類や情報を意のままに操る能力を持つ。他の電脳世界でしか存在することができないサイバークリーチャーと異なり体内に物質データが記憶されているため実体化する事が可能。

ディアナ「ウィンザー」シルヴェスター

D i a n a W i n d s o r S y l v e s t e r

種族 ホモ・エクシミス

性別 女

出身 エディード連邦 EU ブリテン州 ロンドン

生年月日 西暦2981年10月7日

職業 桜関学園高等部生、英国王室王女、女優、歌手、ファッションモデル、フリーメイソン

血液型 O型

瞳 サファイアブルー
髪 ブロンド

本編ヒロインの一人。千九百年の歴史を持つ英国王室の現王、エレアノール女王の孫娘。父親はEU三大財閥の一つ、シルヴェスタ一家現当主のダレン「ウィンザー」シルヴェスター。ガイアに片思いな小悪魔系ツインテール美少女。桜関学園の留学生であり、世界的に有名な芸能人。レナとロゼは親友。

片桐 レナ

Rena Katagiri

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 エディード連邦 北太平洋統合連盟 日本州 横浜

生年月日 西暦2982年8月1日

職業 桜関学園高等部生、女優、歌手、ファッションモデル

血液型 AB型

瞳 エメラルドグリーン

髪 モカ セミロング

本編ヒロインの一人。名門片桐家の一人娘でありガイアの義妹。

ディアナと同じく知名度の高い芸能人。周りからはガイアとは本当の双子の兄妹と認識されている。そして凄まじくブラコン。普段はガイアに貰った羽が付いた帽子をかぶっている。最近は少々ヤンデレ気味。

ロゼ「ヴァレリウス

R o s e V a l e r i u s

種族 ホモ・アトランティア

性別 女

出身 ギアルシア企業国 第零階層・わだつみ

生年月日 西暦2982年4月23日

職業 桜関学園高等部生

血液型 A型

瞳 アクアマリン

髪 ロゼ セミロング

本編ヒロインの一人。人間とは異なる種族、アトラスの美少女。ディアナ、レナとは親友であり、恋のライバル。少し天然だが、面倒見が良く意外としつかり者。兵学科に双子の弟がいる。趣味はオンラインゲームで、電脳世界ではディアナ、レナを凌ぐほどの人気を誇るサイバーアイドル。

白皇院 ユーナ

U n a B y a k u o u i n

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 ギアルシア企業国 第十二階層・桜関

生年月日 西暦2981年2月14日

職業 アストレア最高指導者

コードネーム アストレア

血液型 A型

瞳 エメラルドグリーン

髪 銀髪にルビー色のメッシュ

専用機 1/XF-E14 インフェルノ

ヒロインの一人。現在はユーナ・ヴァレンタインを名乗る。ガイアの実の姉。私設武装組織、アストレアの創始者にして最高指導者。肩の蝶のタトウーから『妖蝶』の二つ名を持つ。クールな銀髪ロングヘアの美女で面倒見がいい。弟のガイアと妹のモニカを捜している。

ガルト＝エアルドレッド

Galt Ealdred

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 不明

生年月日 不明

職業 シルヴァーフォースアクエリアス艦隊司令官。後に脱走兵

血液型 B型

階級 マスター、少佐（脱走前）

瞳 ゴールド

髪 銀髪にアメジストのメッシュ

専用機 1/YF-Z17 フェンリル

エリートばかり集められたエディード連邦独立特殊戦術兵隊、シルヴァーフォースのアクエリアス艦隊司令官であったが後に脱走兵となる。別名はマスターレグルス。かつてはガイアと同じくエディード連邦の秘密研究機関『アーク』で被験体となり、強化人間となった。研究機関でガイアと知り合い、親友の仲になる。後に再会したガイアと隊を脱走する。

剣間 零紅

Reiku Tsurugima

種族 ホモ・エクシミウス

性別 男

出身 エディード連邦 北太平洋統合連盟 日本州 京都

生年月日 西暦2982年5月3日

職業 桜関学園高等部生、シルヴァーフォースアクエリアス艦隊
フェンリル小隊所属パイロット、後に司令官に昇格

血液型 AB型

階級 ルーキー、上等兵。後にマスター、少佐に昇格

瞳 シルバー

髪 黒髪にサファイアメッシュ

専用機 1/YF-N930 不知火^{シフヌイ}

ガイアの親友。桜関学園高等部兵学科の生徒であり、エディード連邦独立特殊戦術兵隊シルヴァーフォースアクエリアス艦隊フェンリル小隊に所属する兵士でもある。真面目な性格で文武両道。兵学科では常にトップに立つ。ガイアが強化人間であることを知らないためガイアの身体能力に到達しようといつも体を鍛えている。

霧沢 レイカ

Reika Kirisawa

種族 ホモ・エクシミウス

性別 女

出身 ギアルシア企業国 第三階層・犬神令

生年月日 西暦2978年1月27日

職業 教師、軍事評論家

血液型 AB型

階級 中尉（除隊前）

瞳 紅蓮

髪 黒髪ベースのヴァーミリオンメッシュのロングヘア

専用機 1/YF-M20 アビス

ガイアのクラス担任であり部活の顧問。見た目は完全に不良のガ
ンマニア。十六歳でギアルシア地上軍第78特殊部隊に入隊。その
後過激派撲滅のため大バビロニアに派遣された。そして多くの命を
救ったとして現地だけでなく世界中から英雄として讃えられた。撤
退後は名誉除隊し、教師となる。現在は軍事評論家としても活動し
ている。

ヴェルノ・ブラッドレイ

Verno Bradley

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 不明

生年月日 不明

職業 シルヴァーフォーススコープ艦隊司令官

血液型 不明

階級 マスター、少佐。後に大佐に昇格

瞳 ジェダイド

髪 紅

専用機 1/YF-1100 カミカゼ 神風

ガルトの同僚。エディード連邦独立特殊戦術兵隊シルヴァーフォ
ーススコープ艦隊司令官、別名マスターベルギウス。ガイア、

ガルトと同じくアークで強化人間となった。ガイアとは顔見知り。常に冷静で感情に左右されない。格闘に長け、腰にはオリハルコン製の刀を携えている。

白皇院 モニカ

Monica Byakuouin

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 ギアルシア企業国 第十二階層・桜関

生年月日 西暦2983年10月30日

職業 ル・ロゼ在学生徒

血液型 O型

瞳 エメラルドグリーン

髪 銀髪

ガイアとユーナの実の妹。クイーンアイランドテロの生存者の一人。ディアナの父、ダレンとテロから生き残った後、ディアナの親戚であるサザールランド公爵家に引き取られる。本人の希望で生存を公表していない。現在はスイスの名門校、『ル・ロゼ』に在学。

紅神 未来

Mirai Benigami

種族 ホモ・サピエンス

性別 女

出身 日本国 東京

生年月日 西暦1995年5月28日

職業 アーク計画被験体

血液型 B型

瞳 ヴァーミリオン、角度によっては琥珀色

髪 黒髪。角度によって紅、淡紅色に変わる

箱舟計画。西暦2012年の人類滅亡の予言を信じた二十一世紀の科学者たちが考案した人体を保存し、後世に残すための計画。通称アーク計画。その被験体であった少女。そして既に滅びた種族、ホモ・サピエンスの生き残り。ガイアによって千年の眠りから目覚める。

ルーシー

Lucie

種族 中級サイバーヒューマノイド

性別 女

出身 第三惑星電腦世界 ギアルシア・日本管轄区 ナスカ

製造日 西暦2997年12月21日

職業 オペレーター、サポーター

レベル 4

系統 Ice Tear

瞳 ガーネット

髪 蛍光イエローグリーン

専用機 1/YU-Z20 ラグナロク

ガイア専用機ラグナロクの専属オペレーター。非常に恥ずかしがり屋。いつもレイアに手込めにされるかわいそうな子。普段はラグナロク中の電腦空間で生活している。内蔵人工知能の代役を務めているため作戦中ガイアがいないときは単独でラグナロク操縦するこ

ともできる。

ワイン

Wine

種族 汎用アンドロイド

性別 女性型

出身 エディード連邦 北太平洋統合連盟 日本州 名古屋

製造日 西暦2988年7月23日

社名 ユニバース社

形式番号 UVA - 672M

瞳 自在変色

髪 ワインレッド

ガイアの家でメイドとして働く女性型汎用アンドロイド。シャイな性格。趣味は料理。元々横浜にあるレナの実家で働いていたが、ガイアとレナがギアルシアに留学する時一緒に連れて来た。毎晩ガイアとレナの寝顔を見るのを楽しみにしている人間寝顔フェチ。

国家一覧(前書き)

物語に登場(?)する予定の国家を一覧にまとめてみました。

国家一覧

> i 1 7 6 7 2 — 9 0 3 <

緑：エディード連邦 赤：モルディブ条約機構

青：南北アメリカ安全保障評議会 白：他勢力及び海

ギアルシア企業国

> i 1 9 0 4 6 — 3 0 9 <

通称 ギアルシア

首都 第十二階層・桜関

人口 約一億八千万人

体制 企業国家制

通貨単位 ギアル

言語 日本語72%（公用語）、標準中国語10%（準公用語）、英語7%（準公用語）、マレー語4%、タミル語3%、広東語2%、朝鮮語1%、その他1%

宗教 神道、仏教、キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、道教など

日本列島の南、ルソン島の東、マリアナ諸島の西に位置する太平洋に作られた人工島群からなる島国。旧日本から独立した太陽系唯一の企業管理下の国家。ギアルシア社を創設した白皇院家当主が代々国の代表である大総統、別名『社長』を務める。首都の桜関はギアルシア島を土台として作られた第四軌道エレベーター外縁階層都市群、通称『天樹神楼』の第十二階層全体を指す。強大な軍事力を持つが、現在第四次世界大戦への不参加を表明している。経済力もあり国際的にも発言力は強い。

エディード連邦加盟国一覧

エディード連邦

通称 エディード、連邦

首都 ラディアスバーレ

人口 約十二億六千万人

体制 連邦共和制

通貨単位 エドラ、ユーロ、円

言語 英語、中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語など

宗教 キリスト教、イスラーム、ユダヤ教など

かつては太陽系第三惑星の惑星国家であったが、2295年に崩壊。現在は南極のエディード本国、欧州連合（EU）、オーストラレーシア合衆国、北太平洋統合連盟、月面都市連合と一部地域が加盟している。第四次世界大戦の三大勢力の一つで現在戦争中。行政は国民に選出された大統領と電脳生命体『Fates』の一体、グライーラシスの同意より行われる。

エディード

通称 南極

首都 ラディアスバーレ

人口 約三億四千万人

体制 共和制

通貨単位 エドラ

言語 英語、中国語、フランス語

宗教 無神論者が大多数、キリスト教、イスラームなど

エディード連邦の中心国家。南極大陸を国土とし、人口の全てが都市部に集中している。

欧州連合

通称 EU

首都 ルクセンブルク

人口 約四億六千万人

体制 連邦共和制

通貨単位 ユーロ

言語 英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語など

宗教 カトリック、プロテスタント、東方正教、イスラーム、ユ

ダヤ教

エディード連邦加盟国の一国。創立は二十世紀。ヨーロッパ全土を国土とする。多くの文化財が残っているため観光産業が発達している。軍事力も強く、EU軍はエディード連邦連合軍の中ではシルヴァーフォースに次ぐ強さだという。

オーストラレーシア合衆国

通称 海洋州、合衆国、オーストラレーシア

首都 ウェリントン

人口 約一億二千万人

体制 共和制

通貨単位 エドラ

言語 英語、中国語

宗教 キリスト教、道教など

エディード連邦加盟国の一国。オーストラリア大陸、ニュージールランド、その他オセアニアの島国からなる国家。最大都市はシドニー。オーストラリア大陸中央部には最古の軌道エレベーターがある。

北太平洋統合連盟

通称 北統連、北洋

首都 東京

人口 約三億四千万人

体制 共和制

通貨単位 円

言語 日本語、英語、中国語、マレー語など

宗教 仏教、キリスト教、イスラームなど

北太平洋広域を領域とするエディード連邦加盟国の一国。北端は日本列島、西端はフィリピン諸島、東端はハワイ諸島、南端はミクロネシア。第四次世界大戦は不参加を表明している。

月面都市連合

通称 ルナ、月面都市

首都 ルナポリス

人口 約二億七千万人

体制 連邦共和制

通貨単位 ルナ

言語 英語、中国語、日本語、フランス語、ドイツ語
宗教 無神論者が大多数、キリスト教、モルモン教
エディード連邦加盟国の一国。政治都市ルナポリス、商業都市玉
兔、工業都市かぐや、軍事都市アルテミスシティの四大月面都市を
中心とした連邦国家。別名、ルナ都市国家群連邦。

モルディブ条約機構加盟国一覧

アジア共和国連邦

通称 亜連、ア連、アジア
首都 北京、デリー、シンガポールの順に三十年ごとに遷都する。
現在は北京。

人口 約二十四億七千万人

体制 連邦共和制

通貨単位 アスト

言語 中国語、タミル語、マレー語、英語、広東語、朝鮮語など
宗教 仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラーム、道教、自
然信仰など

モルディブ条約機構の中心国家。人口世界一。巨大な軍事力を持
ち、兵員数も地球一。上海、ソウル、重慶などの巨大都市が幾つも
存在する。インド洋側のモルディブには軌道エレベーターがある

シベリア共同体

通称 シベリア

首都 ノヴォシビルスク

人口 約六千万人

体制 共和制

通貨単位 アスト

言語 ロシア語、中国語、朝鮮語など

宗教 ロシア正教、自然信仰など

モルディブ条約機構加盟国の一国。二十六世紀のロシア連邦解体時に設立された連邦国家。未採掘の資源を多く埋蔵していることで知られ、国内産業の七割が第一次産業。敵国である北アメリカ自由連邦と国境を面しているため極東地域は条約軍基地が集中している。

大バビロニア・イスラム連合国

通称 バビロニア、イスラム連合国

首都 ニューバビロン

人口 約四億二千万人

体制 イスラム共和制

通貨単位 リアル

言語 アラビア語、ペルシャ語、英語など

宗教 イスラーム・スンニー派、シーア派、東方正教など

モルディブ条約機構加盟国の一国。国名は石油の採掘停止以来国力が衰えていた中東の国家が協力して太古中東で繁栄したバビロニアのような強大な国を目指していくという目標が由来。宗教の自由は保証されている。沿岸部のリゾート観光都市群が有名。

アフリカ連合

通称 AU
首都 ナイロビ
人口 約八億五千万人
体制 連邦共和制
通貨単位 AUフラン
言語 英語、フランス語など
宗教 キリスト教、イスラーム、自然信仰など
モルディブ条約機構加盟国の一國。北部はEU、南部は南極エディードに近いため両端に条約軍基地が集中する。民族意識が強くテロ活動が最も活発な地域。

南北アメリカ安全保障評議会加盟国一覧

北アメリカ自由連邦

通称 北アメリカ、北米
首都 ワシントンDC
人口 約七億三千万人
体制 連邦共和制
通貨単位 アメロ
言語 英語、フランス語、スペイン語など
宗教 カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、モルモン教、伝統宗教など

南北アメリカ安全保障評議会の中心国家。軍事技術はエディードに次ぐ技術を有する。世界一多くのアンドロイド兵が投入されている。最大都市ニューヨークは世界経済の中心地。

ラテンアメリカ統一連合

通称 南アメリカ、南米

首都 リマ

人口 約五億八千万人

体制 一党独裁制

通貨単位 アメロ

言語 スペイン語、ポルトガル語、英語

宗教 キリスト教、伝統宗教

南北アメリカ安全保障評議会加盟国の一国。南端のオルノス岬はドレーク海峡を挟んで南極エディードのサウスシエトランド諸島と対峙しているため議会議軍基地が集中している。なお現在フォークランド諸島はエディード連合軍に占領されている。

北極地域

首都 未定

人口 約四千万人

体制 無政府

通貨単位 アメロ

言語 英語、フランス語、中国語、ロシア語

宗教 無神論者が大多数、プロテスタント、ロシア正教

南北アメリカ安全保障評議会加盟地域の一つ。世界的に珍しい直接民主制が採用されている。シベリア、EUに近いため、議会議軍の重要拠点となっている。

その他の地球圏国家一覧

スイス連邦

首都 ベルン

人口 約二千五百万人

体制 連邦共和制

通貨単位 リーフ

言語 ドイツ語、フランス語、英語

宗教 カトリック、プロテスタント

四方をEUに囲まれた永世中立国。常時軍は編成されていないが、緊急時は十二時間以内に四百万の兵士を収集する事が可能。多くの傭兵が拠点をここに置く。

神聖ローマ

通称 教皇領

首都 ヴァチカン

人口 約千二百万人

体制 制限君主制

通貨単位 ユーロ

言語 ラテン語、イタリア語、英語、フランス語

宗教 カトリック

EUの徹底した政教分離政策により加盟することが不可能であったかつてのヴァチカン市国が信徒の寄付や贈与により拡大した宗教国家。スイスと関係が深く、1/F-RS2W3『セラフィム』な

どの共同開発も行われている。

ロシア共和国

通称 ロシア

首都 モスクワ

人口 約一億七千万人

体制 共和制

通貨単位 ルーブル

言語 ロシア語など

宗教 ロシア正教、イスラーム

第三次世界大戦後にロシア連邦が解体してできた国家。強力な軍事力を有するが、現政権が平和主義を唱えているため第四次世界大戦への不参加を表明している。現在戦争地域の住民の保護や、復興活動、物資の供給など平和目的で世界中の戦争地域に軍を派遣している。地球で唯一宇宙ステーションを保有している。

ペルシア

首都 ペルセポリス

人口 約三百七十万

体制 制限君主制

通貨単位 リアル

言語 ペルシヤ語

宗教 ゴロアスター教、イスラーム

第三次世界大戦後にゴロアスター教徒が集まって建国した独立国

家。かつては隣接するイスラム国家と対立していたが、現在は友好関係にある。

イスラエル

首都 エルサレム

人口 約八百二十万人

体制 共和制

通貨単位 ユーロ

言語 ヘブライ語、英語、アラビア語

宗教 ユダヤ教、キリスト教、イスラーム

EUの加盟を望んだが、宗教色の強さから加盟する事ができなかった国家。かつてはイスラム国家との関係は劣悪を極めていたが、現在は友好関係にある。

アルマディーナ首長国

首都 メディナ

人口 約四百万人

体制 立憲君主制

通貨単位 リアル

言語 アラビア語

宗教 イスラーム

史上最後のイスラム王国。現在バビロニアとは同盟関係。

コロニー・クロイツ

首都 クロイツシティ

人口 約三千三百万人

体制 共和制

通貨単位 ルナ

言語 英語など

宗教 無神論者が大多数、アーレア正教、マーゼス教

ラグランジュ2のコロニー国家。名前の由来はコロニーの形が十字であることから名付けられた。地球からは月で隠れているため視覚でとらえることは不可能。

コロニー・スターランド

首都 スターランドシティ

人口 約四千七百万人

体制 共和制

通貨単位 エドラ

言語 英語、中国語など

宗教 無神論者が大多数

ラグランジュ1に位置するコロニー国家。エディード連邦準加盟国。現存するコロニーの中では最も古い。エディード連邦とは軍事同盟を結んでいる。

地球圏外の国家一覧

アーレア帝国

通称 アーレア、帝国、帝政アーレア

首都 アルカディア

人口 約三十六億七千万人

体制 立憲君主制

通貨単位 ロレア、アレス

言語 アーレア英語、中国語、フランス語、ロシア語、日本語など

宗教 マーゼス教、アーレア正教

太陽系第四惑星の惑星国家。エディード連邦が崩壊した現在、太陽系最強の軍事力を誇る国家。二十四世紀の大火星移民時代より火星の環境を徐々にテラフォーミングしてきたため、現在は大気と海が存在する。さらに都市部は重力制御により地球環境が完全に再現されている。

レヴィーラ

首都 エルアトランティス

人口 約四十億人（うち三十八億人がアトラス）

体制 メリトクラシー

通貨単位 ヴィーナ

言語 アトランティス語

宗教 太陽信仰、地球信仰

太陽系第二惑星の惑星国家。異種族アトラスが建国した国家。金星の表面は非常に高温であるため地下都市が発達している。地球とは異なった科学が独自の進化を遂げている。アトラス自体金星の環境に適応して進化した種族。

ヴァルフォーネス

首都 エリア000（トライゼロ）

人口 約二十三億二千万人

体制 軍事政権

通貨単位 バイス

言語 英語、アトランティス語

宗教 無神論者が大多数、マーゼス教

地球と火星の公転軌道の間を回る人口惑星国家。かつてのエディード連邦管理下時代にエディード連邦のミスにより食料供給が遅れ、多くの餓死者がでた。そのため国民の多くがエディード連邦に恨みの感情を抱いている。現在地球の国家間との国交は無い。

アーレア共和国

首都 フォボス

人口 四千万人

体制 共和制

通貨単位 アレス

言語 英語、アトランティス語

宗教 無神論者が大多数

火星の衛星・フォボスを母体として作られたコロニー国家。アーレアの帝政移行時代に帝政に反対した人々が建国した。現在の帝国との関係は良好。

ミネルヴァ小惑星帯連合

通称 ミネルヴァ、アステロイドベルト

首都 未定

人口 約七千四百万人

体制 共和制

通貨単位 シード

言語 英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、日本語

宗教 マーゼス教など

火星と木星の公転軌道間の小惑星帯付近に作られたコロニーの連合国家。建国以来平和主義を貫いているため軍隊の代わりに自衛兵隊しか存在しない。

木星衛星群連合

通称 ジュピター

首都 ガルマナ

人口 約八百万人

体制 メリトクラシー

通貨単位 マナル

言語 アーレア英語

宗教 マーゼス教、アーレア正教

木星の多くの衛星の地表や地下に作られた都市の連合国家。更なる外宇宙を目指す探検宇宙船や資源調査船の最重要拠点として発展した。外宇宙との情報伝達を担う。そして太陽系外知的生命体の入域調査や外交も行っている。

ソル自由国

暫定首都 コロナシティ

人口 約四十二万人

体制 共和制

通貨単位 ソール

言語 英語、アトランティス語

宗教 無し

太陽内部に存在する巨大惑星「ソル」。その赤道付近に存在する独立国家。現在、太陽の外皮であるフレイムウォールの突破が困難であるためソルとの星間航行は制限されている。

序章　クイーンアイランドテロ襲撃事件（前書き）

オリジナルSF新シリーズです。序章は過去の記憶です。

序章　クイーンアイランドテロ襲撃事件

西暦2990年　7月29日

オーストラレーシア合衆国　ゴールドコースト

この日、私は少ない休暇を利用して家族と共にオーストラレーシア合衆国のリゾート地、ゴールドコーストに来ていた。二泊三日の短い滞在ではあるが私だけでなく妻や子供たちもそれなりに楽しんでいる。

現在は滞在二日目の午後四時を回ったところだ。私は人工島に建てられたクイーンアイランドホテルの屋内プールで遊ぶ三人の子供たちをプールサイドで見守っていた。妻のルシアンナは朝から別行動で、専属の女性汎用アンドロイドを連れてシヨッピングを楽しんでいるらしい。五時には子供たちを連れて妻と合流し、招待されたパーティ会場に向かう予定だ。それまでは一人で子供たちの相手をしなければならぬ。

「お父さん！　一緒に遊ぼう！」

ぐったりしていた私は九歳の長女、ユーナに呼ばれた。

「もう少し休ませてくれよ。さっきの三人背中に乗せて平泳ぎ、結構きつかったんだぞ」

「お父さんがいないとやだ！」

娘の要望に応えるため、私はしかたなく体をほぐして再度入水する。

「パパ見てー。モニカは十めーとるも泳げるようになったよ」

「おー、モニカはすごいなー」

私が六歳の次女、モニカの頭を優しく撫でてやると嬉しそうに私

の背後に回って背中に抱きついてきた。

「ガイアも頑張ってるな。二十五メートル泳げるようになったか？」
モニカを相手にしつつ、私はひたすら泳ぎの練習を続ける八歳の真面目な長男、ガイアに声を掛けた。

「あと少し。今日中に泳げるようになるからお父さん見ててよ」
「分かった。応援してるぞ」

私はガイアの頭も優しく撫でた。

その後の子供たちと遊んだ時間はすぐに過ぎた。水着から着替え終えた私と子供たちは妻との待ち合わせ場所であるパーティ会場のホテルのロビーに向かっている。

「最後に二十五メートル泳げてよかったな、ガイア」

「うん。今度はお姉ちゃんと同じ五十メートル泳げるようになるよ」

「そんなの無理無理。ガイアが私にかなう訳無いじゃん」

「こらユーナ。お姉ちゃんらしくないぞ」

「だって……」

私に注意されたユーナは少し拗ねた。それを見た私はユーナの頭をポンポン叩いて励ます。

「グレンー！ こっちだよ」

私を呼ぶ声と共にハイヒールで大理石の床を走る音が聞こえてきた。見るとドレス姿のルシアンナが手を振っている。

「集合場所を噴水前に変えるって連絡入れたの気付いてる？」

「全然」

私がAIRS^{エルス}を取り出して見るとルシアンナからのメールが三件あった。それはどれも集合場所をロビーからホテル内の庭園にある噴水前に変えるという内容だった。

AIRS。イニシャルに対応した英語を和訳すると星間情報検索システム。元々他の星とスムーズに情報の送受信を行うために開発されたシステムとその装置の名称であったが、現在は財布、証明書、鍵など生活に必要な様々な機能が追加されている。三百年ほど前から各国家が情報格差の解消のために出生届けを役場に届けると同時

に新生児用に渡されるようになった。三十世紀現在では生きていく上で必須のアイテムとなっている。

「すまないな。子供たちと遊んでたら全く気付かなかった。でも何で噴水前？」

「グレンはいつも仕事で忙しいし、せっかくだから家族全員でゆっくり散歩しようと思ってね」

「そういうことか。……それじゃあ今から行くか」

「私も行きたーい！」

「行く行くー」

私の意見に娘のユーナとモニカが賛成した。

「今日はもういいよ。また今度にしよう。このホテルの庭園結構広いし、せっかく招待してくださったパーティーに遅れるのも悪いよ」

「確かにそうだな。だったら明日の朝に全員で散歩しようか」

「私はその方がいいと思う」

「「えー」」

私とルシアンナのやり取りを聞いたユーナとモニカは同時に落胆の声を漏らす。

「姉ちゃんもモニカも子供なんだから大人を困らせるような言い方はやめろよ」

しつかり者のガイアは姉と妹を注意した。

「ガイアの言う通りだ。それにパパとママを困らせる悪い子は夜になつたらお化けに連れ去られるんだぞ」

「お化けなんかいないもん」

そう言い切るユーナに対してモニカはおびえながらルシアンナにしがみ付いていた。

「大丈夫だよ。モニカがいい子にしてたらお化けなんか出て来ないんだから」

「本当に？」

「うん、もし出て来てもママが追いかけてあげる」

ルシアンナはモニカを安心させるために抱き上げた。

「グレン、そろそろ行くころよ。早めに着いてたら安心だしね」
ああ、と一言だけ応えた私は家族を連れて目的地へ移動を開始した。

パーティ会場入口

「えー、ギアルシア大統領の白皇院びやくおういんグレン様と奥さんのルシアンナ
白皇院びやくおういんアルカディア様でよろしいですか？」
「間違いありません」

私はパーティ会場の受付スタッフにAIRSに保存されている招待状のデータを提示して入場許可をもらっていた。

「そちらのお子様も同伴ですね」

「はい」

「それではこちらにサインをお願いします」

私は渡されたペンでタブレットに筆記体で「Glenn」と記した。
「どうぞお入りください」

サインを受け取ったスタッフは私に入場を許可した。

会場はテニスコート四コート分ほどの広さで、開始時間までまだ時間があるにも関わらず多くの来場者がいた。今回はスイスの財閥ブルクハルト家主催の社交パーティで、世界的な著名人が多く参加すると聞いている。子供たちには普段からマナーについて教育しているが、それでも目を離せないでいた。

「お前たち何か食べたい物はあるか？」

「お父さんがいつも食べてるあれが欲しい」

ガイアがテーブルに並べられた料理の中から私の好物であるスモークサーモンを欲しがっているので皿に数枚取って渡した。

「お父さんありがとうございます」

「どういたしまして」

ガイアの分を取った後で私も少しばかり料理をいただいた。今の内にお腹を満たさなければパーティが本格的に始まると他の来場者

との交流で全く料理を口にすることが出来無くなるからだ。

皿に盛られたサラダにサウザンドアイランドドレッシングを掛けながらルシアンナを見ると既に誰かと会話始めている。ルシアンナは火星全域を領土に持つ国家、帝政アーレアの第一皇女であり、ギアルシア企業国大統領である私の妻でもあるためかなり注目される存在なのだ。

「グレン。久しぶりだな」

しばらくすると聞き覚えのある友人の声が聞こえた。声の主は大学時代からの親友であるダレン・ウィンザー。シルヴェスターだ。彼はEU三大財閥の一つ、シルヴェスター家の長男であり、英国王室の王女の夫でもある。今回は偶然彼が管理している会社のシドニ支社とウエリントン支社の視察の日程が私のゴールドコーストでの休暇と重なったため、私に会おうとわざわざこのパーティに参加したのだ。

「一年ぶりか。お互い忙しいからな。奥さんと娘さんは元気にしてるか？」

「おかげさまで二人とも元気にやってるよ。ただ女王陛下の体調はすぐれないけどな」

「ギアルシアでも時々英国女王様の病気についてのニュースを見かけるな。エレアノール女王はお前にとってはお義母様なんだから人一倍大切にしろよ」

エレアノール女王とは現イングランド王で本名はエレアノール・サザランド・ウィンザー。ダレンの義母でもある。

「お前に言われなくても分かっている。それよりお前の奥さんのご家族はどうなんだよ？」

「ここ三年は会ってないな。でもいつもお義父様のアルドヘルム皇帝の元気な姿で映った映像が見れるから大丈夫だと思うけど。そもそも問題あつたらすぐに連絡されると思うし」

「そうだよな。でもなんか結婚する前と後では人生がまるで違う気がするよ。もちろん幸せになるのだが、なんて言うか責任が大き

なる」

「俺もその気持ち、何となく分かるよ」

親友と私は若き旦那の率直な気持ちを呟いていた。

「あつ！ ディアちゃんのお父さんだ。ここにディアちゃん来てるの？」

「ごめんねー。今日はおじさんしかいないよ。それにしてもモニカちゃんも大きくなったなー」

ルシアンナを連れて私の元へやって来たモニカはダレンに抱き上げられた。

「子供の成長は速いからな。さあ、お前たちもダレンおじさんに挨拶して」

「「こんばんは」」

「ユーナちゃんにガイア君。こんばんは」

私は二人で会話していたユーナとガイアを呼んで、ダレンに挨拶させた。

「こんばんは、ダレン。先日はお世話になったね。今度は私の家に遊びに来てってアルシアに伝えておいてくれる？」

「了解。いつも妻と娘がルシアンナたちと遊んでると楽しいからさよならするのが嫌だっって言ってるよ」

ルシアンナは馴れ馴れしくダレンに挨拶した。というのも私とダレン、ルシアンナ、ダレンの妻であるアルシアは全員大学時代からの友人だからだ。私の妻のルシアンナとダレンの妻のアルシアは大親友で、いつもお互いの子供を連れて旅行したりしているらしい。そのため私の子供のユーナとガイア、モニカもダレンの娘であるデアアナちゃんと仲が良い。先日はルシアンナと子供たちがアルシアが住むバツキングダム第二宮殿に三日も泊まりに行ったと聞いた。

「世話になったな。余裕があればダレンも今度ギアルシアに遊びに来いよ」

「そうする」

「多分今から忙しくなると思うからまた後でゆっくり話そうか」

「そうだな。また深夜に会おう。じゃあな、グレン。ルシアンナにユーナちゃん、ガイア君、モニカちゃんもまたね」

そう言い残したダレンはその場から去る。

その後パーティーは本格的に始まった。私はエディード連邦議会下院議員を始め、ハリウッドの有名映画監督や主催者のブルクハルト氏、大企業の重役など多くの著名人と挨拶して回った。

六時間後

「グレンー、私もう疲れちゃったよ。あのイスに座ろ」

あつと言う間に時間は経ち、時刻は十一時を過ぎていた。疲れでユーナは私の腕、モニカはルシアンナの腕で眠っている。ガイアは私の隣で眠たそうにあくびをしていた。私はルシアンナに言われた通りに近くのイスに座った。

「この後俺はダレンに会うから先に子供たちと部屋に戻っていてくれないか」

「分かった。グレンも早めに帰って来てね」

「おうよ」

ルシアンナと話していると人混みの中を無理矢理突破して近付くダレンの姿が見えた。私の前まで来た彼は酷く呼吸が乱れている。

「どうしたダレン。みんなお前を注目しているぞ」

「グレン！ 大変だ！ 武装した集団がホテルを占拠している！」

ダレンの言葉を聞いた周りの客人たちはどよめき始める。

「皆さん落ち着いてください！ 彼の話の詳細を聞いてください！」
私の隣に座っていたルシアンナが立ち上がって騒いでいた人たちを黙らせた。

「ダレン、詳しく聞かせてくれないか？」

「分かった……、」

ダレンの言葉にその場にいた全員が耳を傾ける。

「西棟と北棟を結ぶ九階の連絡通路から一階の中庭を見おろすと南

棟に入っていく武装集団が見えたんだ。その時見えたのは五、六人だった。でも多分それは一つのチームで、実際はもっと多くいると思う……」

「その人たちは本当に武装してたのですか？ 現在は夜ですし見間違いかもしれませんよ」

周りで話を聞いていた誰かがダレンに質問した。

「間違いなく武装していました。人が撃たれているのをこの目で見ました」

ダレンの言葉で周りは再び騒がしくなる。この時はユーナとモニカも目を覚ましていた。

「お父さん何が起こったの？」

「何もないよ。ユーナは眠っていて大丈夫だからな」

ただならぬ状況を感じ取ったユーナは酷くおびえていた。

『皆様！ 落ち着いてください！』

主催者のブルクハルト氏が壇上に立ち、スピーカーを通してその場を仕切った。

『シルヴェスター様の言われたことは事実です。現在このクイーンアイランドホテルは正体不明の武装集団に占拠されていると、先ほど私の元に連絡が入りました。ただ今ホテル関係者と緊急の脱出通路を確保している最中です。どうかお静かにして私共の指示に従ってください』

「お父さん。恐いよー」

「お姉ちゃん静かにしなよ」

ブルクハルト氏の話の聞いて恐がる姉に対して弟のガイアは冷静だった。

「いいか二人とも。死ぬまでお父さんかお母さんから絶対離れるなよ。もしお父さんかお母さんが怪我して動けなくなっても気にせず走って他の人たちと一緒に逃げるんだ。分かったな」

「そんなこと言わないでよ」

ユーナは泣き出しそうだった。

「ルシアンナ。俺にもしものことがあればこの子たちを頼む。取り合えず俺は今から後継者推薦のメールを本社に送るよ」

「グレン……」

ルシアンナの声は途中で詰まる。私は妻の細い体を強く抱きしめた。

「俺は死んでもルシアンナのことを愛してる」

「私もよ」

少しの間抱き合った私とルシアンナはゆっくりと離れた。その後私はAIRSを取り出しギアルシアの本社にメールを送った。

メールを送り終えた丁度その時、パーティ会場の窓ガラスが一斉に割れる音がした。

窓の外からは潮風と共に漆黒のデュエルスーツに身を包んだ武装集団が飛び込む。アジア共和国連邦軍兵士やアフリカ連合軍兵士のデザインデュエルスーツが不均一に着用されているため一目でテロリストであることが分かる。

彼らは登場すると同時に銃を乱射し始めた。

「グレン！ こっちだ！」

親友のダレンが私を導いてくれた。ユーナとガイアに走らせつつ、私はモニカを抱いているルシアンナの手を引いて走り出す。

周りを見ると多くの人が逃げ惑う中、弾丸に撃たれて倒れている者もいた。

「あの扉から出るぞ！」

「分かった！」

ダレンが近くの扉を勢いよく開けて会場の外へ飛び出した。それにユーナとガイア、私、ルシアンナと続く。

「きゃっ！」

ルシアンナの小さな悲鳴と共に彼女の手が抜けるのを感じる。振り向くとルシアンナのわき腹から血が滲み出していた。どうやら扉をくぐる直前、弾丸に打ち抜かれた様だ。

「ルシアンナ！」

私はすぐに彼女の元へ駆け寄る。

「ママ！」

モニカは泣いていた。

「ダレン！ モニカを抱いてくれ！」

「分かってる！」

ダレンはルシアンナからモニカを引き剥がして無理矢理抱き上げた。私はルシアンナを抱き抱える。

「……ダレン」

「何もしゃべるな！」

ルシアンナを抱えながら私はダレンと子供を連れてホテルの廊下を走った。

「ダレン！ これからどうするんだ!？」

「分からない！ 取り合えずサイバー空間へのアクセスポイント探すよ！」

「馬鹿！ ロックかけられてるに決まってるだろ！ こういうときは物資輸送用のエレベーターで一階の荷物管理室まで移動して救援を待つのがベストだ！」

「確かに！ お前偉いな！」

「関心してる場合ではないだろ！」

私たちは一度立ち止まって状況を把握する事にした。

「従業員用の地図が欲しいな。地図さえあればエレベーターの場所が簡単に分かるんだが」

「それならあそこからデータ転送できるだろ。ダレン、お前はルシアンナとここで待ってる。すぐに戻ってくるよ」

ダレンが示した先にはアンドロイドが対応する受付があった。彼はモニカを抱いたまま受付に走っていく。その間に私はルシアンナを床に横たわらせた。

「ルシアンナ、今から傷口を縛るからな」

私の言葉を聞いてルシアンナは無言で頷く。私は急いでスーツの中に着たシャツを脱いでそれを止血のために強くルシアンナの腹に

縛り付けた。その様子をユーナとガイアが不安そうに見ていた。

「後はダレンが戻って来るのを待つだけだな」

縛り終えた私は立ち上がり、ダレンがいる方向を見る。

ダレンがホテルの立体地図をA I R Sに保存して私たちの元へ戻ろうと走り始めたその時、上の階を通過している重々しい足音が聞こえた。そして次の瞬間目の前の天井が爆音と共に破れ落ちる。それと同時に硝煙と一つの巨大な影が降ってきた。

「こいつは……、ゴーレム！」

兵器に関する知識を持ち合わせていた私には目の前の金属の塊の正体を知っていた。巨大な影の正体は大型武装オートマトン、通称ゴーレム。おそらく目の前のものはロシア製の小型、R G O - 9 . 1 2 『サイクロプスS - 7』。

見るとダレンとモニカはゴーレムを隔てた反対側にいた。

「ダレン！ モニカを連れて逃げてくれ！ 俺は違うルートから脱出する！」

「分かった！ 死ぬなよ！」

ダレンは泣きじゃくるモニカを抱えて角の向こうへ消えた。私もルシアンナを抱き起こして逃げる体勢になる。

「ユーナ！ ガイア！ 父さんから絶対はぐれるなよ！」

私の叫びに二人は無言で頷く。

振り返るとゴーレムはダレンではなく私たちをターゲットに武器を構え始めた。一秒でも早くこの場を去らなければならない。

「二人とも走れ！」

私の声と同時に私たち三人は走り出した。

今いる客室の並ぶこのフロアは廊下が一直線で銃撃が当たりやすい。それにゴーレムの基本装備は時空力無限機関供給変換型兵器であるため実弾のように命中率は高く無いものの、その他威力や有効範囲といった全体的なスペックは格段に高い。

廊下の端に非常階段を見つけた私は子供が付いて来ていることを確認しつつ、階段を指して全力で走った。背後からはゴーレムの

銃撃が飛んでくる。

「くっ！」

階段まで残り二メートル程の場所でゴーレムの銃撃が私の右肩を貫通した。

貫通した二つの傷口からは容赦無く血液が流れ出る。それでも私は止まること無く階段の扉を開けた。

「二人とも早く入れ！」

目でユーナとガイアが扉をくぐるのを確認した直後、右足に右肩と同じ激痛が走った。私はルシアンナを抱えたまま倒れ込む様に扉をくぐる。

「扉を閉める！」

私の声に反応したガイアはすぐに扉を閉めた。見たところこの非常階段の扉は相当頑丈でゴーレムの武装でもなかなか破れないらしい。

ルシアンナの身体を床に寝かせた後、私もその隣に横たわった。

「お父さん……」

私の体から噴き出る血液の多さにユーナは真っ青になっている。

「二人ともよく聞いてくれ」

私の呼び掛けでユーナとガイアが私に近寄った。二人は不安と恐怖で震えている。

「ユーナ……、お母さんの薬指に填めてあるリングを取って」

ユーナは私に言われるままルシアンナの指輪を取り外した。

「いいかユーナ。それを一生手放すなよ」

「……何で？ だって……、これお母さんのものなんだよ？」

「ユーナは形見って言葉を知ってるか？」

その言葉を聞いた瞬間ユーナは涙を流し始めた。

「そんなの嫌だよ！ お母さんはまだ死んでないもん！」

「俺の話聞け……、」

「嫌だ！」

「……お化けが来るぞ」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！」
バシッッ！！！！

私は残った力を振り絞ってユーナの頬をぶん殴った。もしかしたら歯が折れたかもしれない、それ位強く殴った。

「お前は長女だろ！　しっかりしやがれ！！　そして強くたくましく生きてみせろ！！！」

「……お父さん。ごめん」

その時ユーナは泣いていなかった。私は手の甲に残った柔らかいユーナの頬の感触を感じながら殴ったことを後悔した。

「ユーナ、ごめん……なさい」

「え！？」

私の謝罪にユーナは戸惑う。

「お父さん！　私が悪かったのに……」

「いいや、父さんが悪い。家族を守るのが父さん役目なのに父さんはそれができなかった……」

「そんなこと無いよ！　私がもつとしっかりしていたらこんなこと……」

「ユーナはいつもお姉ちゃんとしてしっかりしていたよ。モニカが寝ていたら布団を掛けてあげていたし、ガイアに勉強を教えた。それにお母さんが病気の時は看病してた。父さんが仕事から帰って来た時はいつも笑顔で出迎えてくれた。それに比べて父さんは仕事ばかりで父親らしいことをほとんどしてあげることが出来なかった。父さんは父親失格だよ」

「違うよ！　お父さんは間違ってる！」

「ありがとう、父さんは幸せ者だよ」

私はポケットから三つのAIRSを取り出して二つをユーナに、一つをガイアに渡した。

「ユーナに渡したのは父さんとユーナのだ。父さんのはパスワード入力だけで使用出来るようにセキュリティレベルを最低まで下げ

たから利用してくれ。パスワードは父さんと母さんの結婚した年と月日だからな。さあユーナはもうここから立ち去れ。早くしないと悪いヤツ等に捕まるぞ」

「でも……」

「いいから早く行くんだ」

「ガイアは？」

「ガイアは今から話がある。ユーナとは別々に逃げさせるから先に逃げる」

私はユーナに無理矢理階段を下りさせる。

「本当に行つちやうよ？」

「ああ！ 生き残れよ！」

「……パパのバカ！」

嗚咽を漏らしながらそう言い残したユーナは階段を下りて行った。

「お姉ちゃん行つちやったな、ガイア。恐いか？」

「うん」

ずっと静かに私とユーナのやり取りを見ていたガイアはコクリと頷く。

「ガイアにはこれを渡すよ」

私はルシアンナとのペアリングを指から外してガイアに渡した。

「これだけは絶対に手放すなよ、いいな？」

「分かった。一生手放さないよ」

「よろしい。ガイアはしつかりしてるから父さんも安心できるよ。

多分お姉ちゃんよりしつかりしていると思う。それと今のはユーナと会つても言わないでくれよ」

「分かつてるよ。それよりお母さん大丈夫なの？」

「さあ？ もう亡くなってるかもしれないな」

普段感情を余り表に出さないガイアであるが涙を堪えることは出来なかった。

「勝手に殺さないでよ。私はまだ生きてるよ……」

私の隣から弱々しいルシアンナの声が聞こえた。

「お母さん……」

「元気に生きるのよ。さあもう行きなさい、ガイア」

「……うん」

「強く生きるんだぞ。ガイア」

「俺絶対生き残ってやるから」

「おう！ 頑張れよ！」

ガイアは涙を流しながら階段を下りて行った。

「二人とも俺にはもったいない子供だったよ」

「同感よ」

「そういえばモニカもダレンと逃げてくれたかな？」

「私は逃げてくれたと信じてる」

「俺も同じだ。でも短い人生だったけど充実してたな。死んだ今は生前凄く幸せだったってことが分かったよ。これからもルシアンナのこと愛してる」

「まだ死んでないのにね……」

私とルシアンナは抱き合って最後のキスを交わした。

その後はよく覚えてない。視界が段々霞んでいった……

ファイルNO. 574452 ギアルシア前社長 白皇院グレン

の記憶より抜粋

第一章 1 桜関学園

西暦2999年 十二月

ギアルシア企業国 第十二階層 桜関ノースエリア学園街 私立
桜関学園

雪がちらつき始めた十二月中旬の午後。

程良い室温に調節された教室内は睡魔の埒と化していた。その上、歴史地理担当のアダムⅡ王Ⅱランズウィック教諭の夢の世界へ誘う呪音の様な解説授業との相乗効果で室内の三分の一の生徒が眠りに堕ちている。

本日、階段教室の七段目を陣取っていた一人の美少年は静かに月面の立体地図を眺めていた。

長い天然ルビーメッシュの銀髪にエメラルドの双眸、全身からは人工的な香水が微かに漂う。顔は彫りが深く、肌は陶器の様に白い。この人形の様な少年の名は片桐ガイア。十年前のクイーンアイランドのテロ事件の生存者であることは本人以外誰も知らない。

「ここらこら、お前たち！ 考査の点数四割以下だったらレポート三十頁分メール提出させるからな！」

王教諭の警告を聞いて渋々起きる者もいれば、無視しているのかそもそも聞こえていないのかは定かではないが、微動だにしない死体の様な者もいる。そんな日常的な教室を見回して思わずため息をつきつつ、ガイアはしんみりと粉雪が舞う窓の外を眺めた。

三十二階に位置する王教諭の教室から校庭を見おろすと点の様な人間が活発に動いている。体育の授業の様に見える光景だが、実際はそんな優しい言葉は当てはまらない。彼らは兵学科の生徒で、一日の半分はトレーニング等の野外授業となっている。それは夏の溶

けるような暑い日でもブリザードが襲うツンドラ気候な日でも中止されることは無く、普通科の生徒から見ると兵学科に所属する生徒は地獄の様な学園生活を送っている。そのため中退する者も普通科に比べ圧倒的。おそらく今彼らは学園内を何十周も走らされているのだろう。

教室内に視線を戻したガイアは室内の日常的な普通科の生徒と屋外の非日常的な兵学科の生徒を見比べて不思議な感覚を覚えた。高等部二年生にもなれば世界の現状はある程度理解できる。十七歳の一般学生であるなら誰でも四年前に始まった人類史上四度目の世界大戦のことは知っている。だがそれはガイアにとって余りにも非日常的で地球上の何処かで多くの兵士が日夜戦っていることは分かっている。毎日日常とは無縁としか思えなかった。毎日兵学科の生徒を見る度に戦火は日常に近づきつつあることを認識するものの、それでも現在の平和な日々が日常であると感じる自分のことがガイアは腹立たしかった。

「難しい顔してどうしたの？」

思いに耽っていたガイアは隣から聞こえたディアの声で我に返る。気付けば終業のチャイムは鳴り終わり、周りの生徒はホームルームへ戻り始めていた。

ガイアが右隣の席を見ると先程まで机に伏せて熟睡していたツインテール金髪美少女がイメージプレートに映し出された教科書ソフトウェアを閉じて有名ブランドのバッグへ片付けていた。彼女の名前はディアナ・ウィンザー・シルヴェスター、愛称はディア。容姿端麗でサファイアの双眼を持つ英国人少女で、その正体は英国王室の王女様。その上、学生であるにも関わらずモデル、女優、歌手として多分野で活躍している。若くして多才である故に芸能界でも一目置かれる存在なのだ。勿論知名度は世界規模で地球に限らず他の星にも多くのファンがいる。ちなみにガイアとディアが知り合ったのは二人が桜関学園中等部に入学した十二歳の時で、以来二人は今日まで友好関係にある。

「少し考え事してただけだ」

ディアに受け答えしながらガイアもホームルームに戻るために教材を片付け始めた。

「どんなこと？ どうすればケーキバイキングでたくさん食べられるのか、とか？」

「阿呆か」

ガイアは適当に答えて席を立つ。

「もー、酷いよガイアー。でもディアはツンデレガイアにもきゅんときちやうかも」

お前は日本人か！とツツコミ入れたくなるほど厄介で流暢な日本語を話すディアを無視してガイアは教室の階段を降りた。

「無視するなー！」

走って追ってきたディアを待ちつつ、ガイアは時間を確認する。

「ちよつと何で無視するの！」

「ディアを相手にしたら被害を被るからな」

「む、それどうということ？」

不満そうなディアは日本人の様に頬を膨らました。

「アイツ等を見る」

ガイアが目で示した先で大勢のディア信者たちがすさまじい殺意をガイアに放っている。しかしディアが振り向いた瞬間信者たちの殺意は一瞬で消え、表情は笑顔に変わった。ディアが彼らにスマイルで手を降ると全員変なテンションで歓声をあげた。

「ディアちゃん最高！！！」

「ディア様俺を調教してください！」

「俺と結婚してくれ！」

「……今言つた奴死ね」

三番目の信者はめでたく他の信者に葬られる。

そんなにぎやかな連中から二人は視線を戻した。

「つまりディアのファンがガイアに迷惑掛けてるってこと？」

状況を察したディアはどこか申し訳なさそうだった。

「まあそういうことだ」

「……ごめんねガイア。やっぱりディアはガイアと一緒にいない方がいいのかな？ ディアは悲しいけどガイアに迷惑だったら……」

「気にするな。こういうことはレナのおかげで大分慣れてる。ただディアのフアンの前では少し距離を置いてもらえると俺としては有り難いかな」

ディアが言い終わる前にガイアが付け加える。それを聞いてディアが安堵の表情を浮かべたのがガイアには分かった。

「ありがとうガイア。愛してるよ」

「だから冗談でもそういうことを奴らの前で言うなよ……」

「……ご、ごめんなさい」

ディア信者の嫉妬の嵐を感じたガイアは思わずため息をつく。

「とにかく、早く行こう。出口でレナとロゼが待ってるからな」

「そうだね」

地歴教室の出入り口を見ると二人の美少女がガイアとディアを待っていた。一人はガイアの義妹の片桐レナで、もう一人はクラスメイトのロゼ＝ヴァレリウス。

ガイアの義妹であるレナはディアと同じくファッションモデル、女優、歌手として活躍しているセミロングの栗色の髪に碧眼の美少女で、正体は優秀な軍人を多く輩出した名門片桐家本家の一人娘。

専用機1/YF-700『ヴァジュラ』のパイロットである祖父の片桐森羅將軍、通称マスターカーノープスは三大国家の一つであるエディード連邦の軍人で、エディード軍の独立特殊兵隊・シルヴァーフォースに所属する世界的に有名な人物である。ただしレナは代々軍人の家系であるにも関わらず親友のディアと共に芸能界で生きていくことを選んでいる。そのためレナの家族は養子のガイアに後を継いで軍人になることを強く望んでいるのだ。

レナの隣に立つロゼはアトラスと呼ばれる種族で、ピンク色の毛の天然癒し系美少女。いつもアトラスの特徴であるふさふさな大きな耳を動かしていて、その耳を優しく撫でると気持ち良さそうに昼

寝する猫みたいな娘。ディアやレナと違って芸能界で生きている訳ではないがディアとレナが司会を務める番組で度々紹介されているので世間では有名人と認識されていたりする。

アトラス。人間の親戚に当たる異種族で、人間と同じく霊長類ヒト科の生物。学名はホモ・アトランティア。見た目は毛の生えた大きな耳と毛に覆われた尾以外は人間とほぼ同じで、声帯の構造も人間に非常に似ているため人語を操ることも可能。約一万二千年前に大西洋に沈んだアトランティス大陸の住人で、高度な科学技術を有した彼らは自ら大陸を沈めた後に金星の地下に都市を造って移住した。その後二十四世紀の人間による大規模な金星開拓により人間と再会。以降彼らは人間との共存を選ぶ。人間と同じ『人』である彼らは自らをアトラスと呼ぶのに対し、人間のことをテラノスと呼ぶ。三十世紀現在、地球にはおよそ二億人、金星の惑星国家・レヴィーラには三十八億人ものアトラスがいる。

「二人ともお待ちせ」

ガイアと教室を出たディアは親友のレナとロゼに声を掛けた。

ちなみにガイア、レナ、ディア、ロゼの四人は同じ一年Eクラス生徒だが地歴公民の選択教科が違うため、社会科の授業の時は地歴のガイアとディア、政経のレナとロゼで分かれてそれぞれ違う教室で授業を受けることとなっている。

「あれれ？ 今日遅かったね。もしかしてガイアとイチヤイチヤしてたの？」

ふわふわで大きな淡いピンク色の耳を可愛らしく動かすロゼの言葉にディアは顔が熱くなるのを感じた。

「そそそんなこと無いよー!!!」

即座にディアは親友の言葉を全力否定する。

「抜け駆けは協定違反だったよね？ 確か違反者は『一日奴隷になつてご奉仕する!』だった気がするんだけどなあ……」

ニヤニヤしながら妄想に耽るレナを見たディアは恐怖を感じた。

「だから！ そんなことしてないってば!」

「さつきから何コソコソ三人で話してるの？」

いきなりガイアの声が聞こえて、ディアはびくつと反応してしま
う。

「ガイアには関係ないの！」

「えーと、……ごめん」

地雷踏んだことを自覚したガイアは取り合えず謝った。

「とにかく！ ディアは何もしてないの！ そんなことより今日は
レナのお家にお泊まりすること覚えてるの？」

「うわーディアが無理矢理話変えた」

「もー！ ……ううう、レナがいじめてくるう」

「ちよつと泣かないでよディア。レナが悪かったから」

「よしよし」

レナが謝る一方で、ロゼはディアの頭を優しく撫でる。

こんなやり取りをしながら一行はホームルームへ向った。

第一章 2 兵学科

私立桜関学園。ギアルシア社直営にしてギアルシア企業国一の七百年の歴史を持つ名門伝統校。初等部から大学院までまかなう総合学校で、キャンパス面積は世界一。初等部から中等部は普通科のみ、高等部からは普通科、商業科、工業科、兵学科、芸能科に分かれ、大学からは更に学科が増える。生徒は地元出身が四割で、残りは留学生。理事長は代々ギアルシア社を創設した白皇院家の当主が務める。校舎は数十にものぼる。一番代表的な校舎はクリスタルタワー。第十二階層の一部を吹き抜けにした空間に建築物自体を重力制御によって浮遊させている空中に浮いた校舎。セントラルタワー、サウスタワー、ノースタワー、イーストタワー、ウェストタワー中央棟、南棟、北棟、東棟、西棟の五つの高層建築からなる巨大校舎で、周りの地面と連絡橋でつながっている。

「なあガイア。明日暇？」

ホームルームに戻って自分の席へ座るや否や、ガイアは悪友のアラン＝コルトレーンに話しかけられた。アランとは高等部からの付き合いで休憩時間はいつも日常会話を交わす仲。外見も中身も不良だが、友人のことを第一に考えてくれる頼れる奴だったりする。ちなみに彼の兄はギアルシア領イーストアイランドのイーストゲットーに拠点を置くイタリア系のマフィア関係者らしい。

「またカジノでも行く気か？」

「正解！ ちなみに今回は香港！」

「何で？」

「チャイナ服のお姉さんと麻雀したいから」

「相変わらずだな。まあ俺は別に行ってもいいけど」

「さすが俺の相棒！」

「相棒になつた覚えはないがな」

「ねえお兄ちゃん、レナとの約束忘れたの？」

左隣の席に座るレナが不満そうな表情を浮かべて睨む。

「えーと、何か約束したっけ？」

「むうー！ レナとお出かけするって約束した！」

「……………？ そんな約束したっけ？」

「約束したよ！ レナは一週間前からずーっつと明日を楽しみにしてたのに！」

レナは凄まじい勢いだ。

「ていうことだからすまん、アレン」

「ガイアはシスコンだし、仕方ねーか。他当たってみるよ」

「うるせー！ 俺はシスコンじゃねーよ！」

去っていくアレンの背中に反論するも無視られた。

「お兄ちゃんてシスコンなの？ 実はレナもブラコンでおにーたんラブだよ。これって両思いだよね？」

誤解だ…………。

レナは期待に満ちた瞳で見つめてくる。

「俺の言うシスコンはシスターコンプレックスではなくて…………」

「ではなくて？」

「えーと、………… システムコントロールのことであって…………、その…………」

ガイアは適当なこと言っただけで逃げようとする。

「いつも思うけどお兄ちゃんって嘘付くのが下手だよ。そこも含めて可愛いけど」

レナは背後に回ってガイアの首に抱きついた。レナの胸の段差を背中を感じたガイアは顔面が熱くなる。

「おいレナ！ みんな見てるだろ」

『イチヤイチャしゃがって！』『このシスコンが！』『っーか誰も見ていなかったらいいのかよ』といった男子の無言の圧力が容赦なく襲いかかる。

「別にいいよ。家では二人でもっと刺激的なことやってるし。ねー、おにーたん？」

「嘘言っな」

レナは両手をガイアの胸、腹部の順にスライドさせて上半身の筋肉を触り始めた。

「ちよつと！ 止めるレナ！ …… な！？ そこははまずいだろお！！」

一部始終を鷹の様な目付きで見ているクラスの一派、レナ教信者たちが今にも暴動を起こそうとしている。

誤解だ……、マジで。まあいつものことなのだが……

「勇士よ！ 今こそ我らが女神、レナ様をサタンの魔の手から救い出すのだ！」

「……オー！！！！」

レナファンによって急遽ガイア討伐連合が結成された直後、ホルムルームの扉が開いた。

「席につけ。早く終わらすぞー」

入って来たのはガイアのクラス担任であり元軍人の美人不良教師、霧沢きりさわレイカ。ヴァーミリオンメッシュの入った黒髪、左目のスカルアイタトゥーの眼球刺青、右耳だけに付けられた禍々しい逆十字のピアスに金属の擦れ合う音が鳴り止まない不道德な服装という一般的な教育者のイメージから有り得ない程かけ離れた若き女教師。しかし男女問わず生徒からの人気は絶大で、多くの生徒から尊敬されていたりする。「お前たち何してる？ レジスタンスでもする気か？ そうでなければ早く席に着け」

レイカの注意によってガイア討伐連合は結成から数秒で一時解散し、各自それぞれの席に戻る。

「ランス、号令を頼む」

レイカは生徒委員のランス＝ベルナルに指示を出した。

「姿勢、礼」

何故かここ、私立桜関学園は設立された七百年前からのしきたりとして日本風の挨拶が伝統として残っている。

「来週からは冬休みが始まる。だからと言って勉強を疎かにしないように。それといつも言ってることだが、戦争地域への旅行は禁止

だ。以上！ 解散！」

レイカの『解散！』の声と同時にガイアは荷物を持って教室を飛び出した。後ろを見るとレナファンが遅れて廊下に出て来た。

「ガイア！ 神聖なるレナ様に何をした！？」

「レナ様に触れるなど万死に値する！」

口ぐちに叫びながら追ってくるレナファンたちは時間と共に人数が増える。どうやら騒ぎを聞きつけた他クラスのファンまで加勢しているらしい。

「まったく気持ち悪い連中だな」

ガイアはホームルームのある中央棟十六階から一階まで吹抜けとなっている十三階まで階段で降りた。そして一階まで見降ろせる吹き抜けの手摺に飛び乗るとそのまま空中に飛び出して落下する。

一瞬で二階下の十一階へ着地してショートカットに成功したガイアは休むこと無くすぐに走り始めた。

「こら！ 死にたいのか！」

たまたまその場を通りかかって一部始終を見た教師が物凄い見幕で怒鳴る。

「死なねーよ！」

普通の人間なら躊躇うはずの行為だが、制服の中に市販のデュエルスーツを着ていたガイアは全く恐怖を感じていなかった。

デュエルスーツ。元々は旧アメリカ合衆国の軍部が開発した人間の身体能力を極限まで高める兵士用戦闘服。三十世紀現在は軍用だけでなくスポーツ用や介護用など民間にも出回るようになった。

「悪いが俺たちも加勢させてもらうぜ」

中央棟十一階から連絡通路を通って兵学科の管理棟である北棟の八階に移動しようとその目前まで移動したガイアの前に新たな勢力が立ちはだかった。

「積年の恨み！ 今ここで晴らさせてもらうー！！」

目の前で道を封鎖する新たな勢力はディアのファンたちだった。どうやらレナのファンと共に日頃から両方のファンから恨まれてい

るガイアを捕らえて袋叩きにするらしい。

「くそっ！」

ガイアは少し後退って反対方向へ再度走り出す。

少し走ると階段を発見したガイアは透かさずその階段から下り始める。

「頑張ってるなー」

ガイアが階段を走って降りていると悪友の一人である生徒委員のランスがいきなり現れて走りながらついて来た。

「助けてくれよ！」

「それは無理だなー。これから部活あるし。じゃあなー」

「マジかよ」

非情にもサッカー部のエースであるランスは更にペースを上げて階段を降りて行った。

「逃がすか！」

今度は下の階からレナ信者たちが駆け上がってくる。そして更の上の階からはディア信者が迫って来た。踊り場にいるガイアにとっては絶体絶命の状況だ。

「こっちだ！」

終わった……、ガイアがそう思った瞬間誰かに肩を掴まれた。そのまま身体はどこかへ引き込まれる。

「大丈夫か？」

突然の出来事に戸惑いつつ前を見ると中等部からの親友、つるぎまれ 剣間零紅の姿があった。

「お陰様で何とかな」

「しかし恐ろしい連中だな」

「全くもって同感だ」

ガイアはその場に座りながら徐々に再会した兵学科の親友を見た。天然サファイアメッシュの黒髪に銀の瞳しろがねを持つ美形日本男子。成績優秀かつ抜群の運動神経で、兵学科の模範的存在。高等部に進学する時兵学科を選択したため現在ガイアとはメールでしかやり取り

をしていない。

「久々に会ったけどガイアはそんなに変わってないね」

「まあな。ていうかここは何処なんだ？」

「ここは教師と兵学科の生徒のみが知る裏階段。普段は兵学科の生徒が屋内戦を想定した訓練を行う場所なんだ。そしてラツキーなことにガイアは丁度表の階段とつながっているこの壁の前で追い詰められた。しかも俺の目の前でね」

「そういうことか。でもよく俺が壁を隔てた向こうにいたことが分かったな」

「扉を解放しない限りこの壁はこちらから見ると透けているからね」
先程まで白かった壁を見ると段々透明になって壁の向こうが見えてきた。

壁の向こうではレナとディアのファンの連合軍が悔しそうな仕草を見せる。中には壁をベタベタ触って仕掛けの存在を疑う者もいる。

「大丈夫なのか？」

不安になったガイアは零紅に聞いてみた。

「大丈夫。向こうからこちらは見えないうし、向こうから扉を開けることもできない」

「そうか、それなら安心できるな」

一先ず安心したガイアは走り疲れた足の筋肉をほぐした。

「ガイアはこれからどうする？」

「戻る訳にもいかないし。違う出口教えてくれないか？」

「了解」

こうしてガイアは他の出口を案内されることとなった。

「しかしこの校舎にこんな巨大な秘密の空間があったとは」

「この学園はあらゆる戦場をシミュレーションするためにいろんな施設を用意しているからね」

ガイアと零紅は長い模擬戦場用裏階段を二人で下っていた。

「つーか何であそこに零紅がいたんだ？」

「自主トレで階段を何往復もしてたから」

「納得」

ガイアは歩きながら腰に挿していた新品の黒い大型拳銃を取り出して零紅に見せた。

「一昨日新しいの買ったんだ」

「おお！ ついにファイアークラウンまで手に入れたのか！ しかも限定モデル！」

「恥ずかしながらレナに土下座して頼んで購入して貰った。買った日はすぐ部室に行ってレイカに自慢しに行っちゃったよ」

「へー」

さすが兵学科の生徒といったところか。零紅は見ただけで永久機関を搭載したギアルシア社製の名銃、ファイアークラウンだと分かっていた。

「そんなことより武器の持ち込みは校則違反だろ」

「仕方ねーだろ。射撃部の部員だし」

キャンパス内には射撃場が有るため桜関学園には実弾射撃部が存在する。その部員であるガイアは普段から実弾銃を手元に持っていた。

「まあガイアが問題を起こすことは無いと思うけど、教師に見つかったら大変なことになるかもよ」

「大丈夫。俺の担任は銃程度で生徒を叱ったりしない。そもそも担任が部活の顧問だし、いつもレイカに銃コレクションを自慢されるからな」

「確かに霧沢先生なら見つかったても全然大丈夫そうだね。むしろ喜びそう」

ガイアの担任、霧沢レイカは教師でありながら軍事評論家という顔を持つ。そして筋金入りの銃マニア。自宅にはハンドガンを始めショットガン、グレネードランチャー、アサルトライフル、スナイパーライフル、ガトリングガン、ロケットランチャーなど仕入先不明の品までも一通り揃っている。その保有数は博物館並で、彼女の

部屋は軍の武器庫顔負けの状態だという。そのため度々銃専門誌に取り上げられ、業界ではかなり有名だったりする。

「あの教師の家はどんな軍隊に包囲されても最低一ヶ月は持ち堪えられるとまで言われているからな」

「マジで？」

「それぐらい大量の武器が有ると言うことだ。……そういえば零紅は何か変わったことあるのか？」

「先日エディード連邦のシルヴァーフォースからスカウトされた位かな」

「へー、……って、マジで!？」

「来月から正式に入隊することになったよ。確か所属はマスターレグルス率いるアクエリアス艦隊だったな」

エディード連邦。二十七世紀前半に勃発した第三次世界大戦後に建国された連邦国家。首都は南極大陸中心のラディアスバーレ。四年前の分裂以前は地球上のほとんどの地域が加盟していたが、現在はEU、オーストラレーシア合衆国、南極直轄地と一部地域しか残っていない。現在は分離独立したアジア共和国連邦を中心に発足したモルディブ条約機構軍、同じく分離独立した北アメリカ自由連邦を中心に発足した南北アメリカ安全保障評議会連合軍の両軍と戦争状態にある。この三勢力の戦争は俗に第四次世界大戦と呼ばれている。

零紅の入隊が決まったシルヴァーフォースとはエディード連邦の独立特殊戦術兵隊のことで、エディード正規軍から独立しているため軍の許可無く独自の判断で独自の行動をとることができる軍事機関別名は白銀兵隊。名前の由来はかつて南極大陸を防衛していた時代の兵士の服装の色が白銀であったためと言われている。現在は世界一エリートかつ最強の軍として恐れられている。階級は下からルーキー、ソルジャー、コマンダー、マスターの四つ。優秀な兵士には星の名の称号が授与され、以降階級と組み合わせて呼ばれるようになる。シルヴァーフォースには多くのマスター階級の兵士がいるが、

その中でも最優秀の十二名はゾディアークと呼ばれ、機関が所有する十二名の艦隊の指揮権がそれぞれに与えられる。

「それじゃあこの学園中退するの？」

「いいや、俺が学生のままでいいことを入隊条件にしたらそれが許可されたんだ。だから大学卒業まではガイアと同じこの学園の生徒でもある」

「なんか少し安心してつつも親友に先越されて複雑な気分だ」

「でもまだまだガイアに勝てないことは沢山あるじゃん。射撃の腕前や身体能力、それとかつこよさとか」

「こいつめ！ 最後の微妙に照れるだろ！」

「やめろよ！ くすぐりたい！ だって事実だろ！？ ガイアファシオンクラブもあるし」

「それはお前もだろ！」

しばらく二人は子供の様に攻撃し合った。傍から見るとBL物のワンシーンにも見えなくもないが、本人たちにはそんな趣味は無い。

「ガイア？ お前のAIRS鳴ってないか？」

ガイアのポケット内からの音に気づいた零紅が訊ねる。

「ホントだ。レナからの通話だ」

零紅とふざけ合っていたガイアはAIRSの通話機能を起動した。

『ちよつと！ お兄ちゃん今どこにいるの！？』

レナの声は少し怒り気味だった。

「えーと、……秘密の空間」

『変なこと言わないでちゃんと答えてよ！ ずっとお兄ちゃん待ってるんだからね！』

「マジで秘密の空間だって！ リアルに」

『もー！ その冗談はどうでもいいから中央棟三階の玄関に来て。レナたちここで待ってるから』

「はいはい分かりました。今すぐ行きます」

『じゃあね』

「ああ」

通話機能を停止してポケットに入れたガイアは零紅に道を聞きながら三階まで移動を始めた。

第一章 3 出演依頼

ギアルシア企業国。二十五世紀前半に旧日本から独立した世界初にして唯一の企業が管理する国家。人口約一億八千万人。面積約五十八万四千平方キロメートル。首都はギアルシア島の第十二階層・桜関^{オクセビクノ}。第一公用語は日本語、第二公用語は英語と中国標準語。人口の六割が日系人、あとは多い順に中華系、マレー系、インド系、オーストラリア系白人と続く多民族国家。四方をエディード連邦加盟国である北太平洋統合連盟に囲まれたルソン島の東、日本列島の南に位置する太平洋上の人工島群からなる島国。司法、行政、立法そして軍部は全てギアルシア社創始者の一族である白皇院家が掌握している独裁国家。ただしギアルシア社で生み出された二人の電脳生^{サイバークリ}命体の助言により代々白皇院家当主は常に国民にとつて最善の政策を選択しているため、ギアルシアの長い歴史の中で独裁による圧政に至ったことは無い。現在どの国家群にも属さないギアルシアは第四次世界大戦への不参戦を表明する平和条約、『ヒロシマ条約』に調印した国の一つで、大戦中立主義を国の方針として掲げている。

ヒロシマ条約とは北太平洋統合連盟の平和文化都市、広島で締結された大戦への不参戦を表明、実行する条約のこと。現在、北太平洋統合連盟をはじめギアルシア、スイス、各月面都市など大小合わせて四十三もの国や地域がこの条約に調印している。

ギアルシアの歴史は遡ること八百年、二十三世紀前半から始まる。当時、旧日本の企業、白皇院グループの日本経済水域資源開発社によって現在のギアルシア島の位置に資源開発拠点人工島『わだつみ島』が建造される。そこを中心に海底資源の採掘が始まる。それから約五十年後、資源開発のために島に住み着いた社員の数が増えて『わだつみ市』となった。その時から白皇院グループの企業の本社がわだつみ市に移り始める。二十四世紀になると島の人口は五十万人を越し、人口の増加に伴って島自体も大きく増築されていった。

この頃にはわだつみ市は世界中で知られるようになり、多くの企業が白皇院グループとの契約の下で支社を置くようになる。この時既に島の資源採掘拠点としての機能は薄れ、世界が注目する経済と技術の島となっていた。その後、二十五世紀になるとわだつみ島には軌道エレベーターが建設され、周りにも多くの人工島が作られる。当時日本は六百年間たまり続けた国債の借金により財政破綻する。それと同時に白皇院グループがわだつみ市を独立させ、ギアルシア企業国と名付けられる。わだつみ島はギアルシア島に名前が変更され、白皇院グループの企業は全て統合してギアルシア社となる。独立直後、日本に多額の財政支援をしたギアルシアは以降日本のパートナーとなる。国際会議では日本のサーポートにより本格的に独立国としてデビューを果たした。これにより移民が急激に増加、二十世紀末には人口一億人を突破。住居確保のためギアルシア島を大幅改造する。土台の島は直径八百キロに拡大、その上に改築された軌道エレベーターを取り巻く形で柵田状に厚さ二十メートルの円盤状の階層プレートを十六枚取り付ける、その内の第十二階層・桜関を首都と定めた。その後の四百年間は少しずつ増築と改造を繰り返し、現在の形となる。階層によって標高が変わってくるため各階層ならではの気候があり、第零階層・わだつみは亜熱帯の気候、首都の第十二階層・桜関は冷帯の気候、第十六階層・高天原は高山気候といった具合だ。現在まで崩壊すること無く発展してきたギアルシアは今日、強力な軍と財力を持つ大国として世界中の誰もが知る国となった。

桜関学園 クリスタルタワー中央棟三階 玄関口

途中、零紅と別れたガイアは一人でロッカールームにコートを取りに行った後、レナたちが待つ玄関口まで移動した。あれからどうやらレナとディアのファンたちは解散したらしい。

上靴から外靴に履き変えたガイアはコートを羽織りつつ玄関口で

仁王立ちするレナのもとへ駆け寄った。レナの背後にはディアとロゼもいる。

「遅い！」

元々あんたのせいだろ、と言いたいところだがここは我慢する。

「ごめん」

不本意ながらガイアはレナに謝った。これも全ては家計を管理しているレナによる小遣い減額を阻止するため。

「それじゃあ許してあげるからレナの言うこと一つ聞いて」

「何？」

「今晚レナとディアの生放送番組にゲストとして出演して」

「は！？」

レナの依頼は余りにも予想外な内容だった。いつもなら『今晚一緒に寝よ？』とか言われてからかわれるのだが。

「本当はレナが土下座してガイアに頼む予定だったんだけど、レナはプライド高くて悪い子だから小遣い減額というカードをちらつかせつつガイアの遅れを理由に命令する事を企てたんだよ」

隣で見ていたロゼが耳をピョコピョコ動かしながらガイアにカミングアウトした。

「ちよつとロゼ！ 余計なことは言わないの！ そしてついでにこのけしからんほど萌えるふかふかな尻尾め！ レナがこうしてくれる！」

「いやああん！ レナの変態！」

指摘されて顔を赤く染めたレナは仕返しにロゼのピンク色の毛並の尻尾を掴んだ。

レナとロゼの二人がレスレスな戯れをしている最中、ディアはレナに変わってガイアの番組出演交渉を続けた。

「ディアと一緒に番組出てくれないかな？」

「何で俺？ 有名人でもないのに」

「分かってないな！。ガイアはイケメン学生射撃手として有名なんだよ。校外にもファンクラブもあるし」

「マジで？ つーか何で？」

「一番の原因はいつもディアがブログに映像付きでガイアのこと書いてるからかな」

「……初耳だ」

自分が知らないところで有名になっていることはガイアにとって衝撃的だった。そしてガイアは先日街を歩いているときいきなり見知らぬ女性たちにAIRSで立体映像を撮られた理由が分かったのだ。

「とにかく今日はレナたちと番組に出演して。出演しなかったら三ヶ月はお兄ちゃんのお小遣い無しだからね」

ロゼの尻尾で遊び終えたレナはガイアの交渉に復帰する。

「えー、……本気ですか、レナ様？」

一応冗談の可能性も考慮して今一度ガイアはレナに聞いてみた。

「勿論。それに既に先週の番組でレナのお兄ちゃん連れて来る宣言しちゃったもん。お兄ちゃんだって妹を嘘つきにしたくないよね？」

「うっ……、反則だ。」

「ねえお兄ちゃん。だめ？」

レナはガイアに上目遣いの追加攻撃を放つ。

「……分かったよ。出演しますよ。」

「ホントに？」

「ああ。男に二言無し」

「ありがとうお兄ちゃん！ 大好き！」

ガイアに飛び付いたレナはそのままガイアの胸に頬をすりすりした。一方義妹の柔らかい身体に抱きつかれたガイアは硬直してしま

う。

「レナ！ 協定違反！！」

ガイアに抱きつくレナを見たディアとロゼが同時に叫んだ。しかしガイアには二人の言葉の意味が理解できない。

「これは兄妹として当然のスキンシップ。だから協定違反にはならないもん」

「そんなのレナだけずるい！」

「私だつてガイアの側室の一人なんだよ」

レナの言い逃れに対してディアとロゼが反論する。しかもロゼはなかなかの問題発言、……嘘ではあるが。

「こつなつたらディアもハグしちゃうもん」

そう言つてディアはレナの左隣からガイアに抱きついた。

「私は側室として当然だよな？」

ロゼもディアに続いてレナの右隣からガイアに抱きつく。このハ
ーレム状態にオーバーヒート寸前のガイアはただ石化することしか
出来なかつた。

「青春満喫してるな」

石化中のガイアの背後から声が聞こえた。見ると眼帯をしたレイ
カがいる。一応教師であるレイカは職員会議の時はちゃんとスカル
の眼球刺青を眼帯で隠すのだ。とはいつても眼帯にもスカルが描か
れているのであまり変わらない様な気もする。しかし誰もが恐れて
いるためレイカを注意する教師はいない。

「助けてくれ！ レイカ！」

美少女に囲まれたガイアはレイカに救済を求める。

「女性に対する経験が極端に不足しているガイアには良い訓練だ」

「そんな！ 大事な部員を見捨てる気なのか！？」

「まったく、男なんだからこれ位対処しろよ。それと女子三人も程
々にしておけ。ガイアの問題が崩壊するぞ」

「……はい……」

担任に注意された美少女三人は渋々ガイアから離れた。

「それと確かレナとディアはこれからGMAで仕事あるだろ？」

「そうだよ」

レイカの問い掛けにレナが答える。

「私もこれからGMAで仕事あるから一緒に行かないか？」

「勿論いいよ」

GMA。ギアルシア・マスコミュニケーション・アソシエーション

ン。和名、ギアルシア情報伝達協会。ギアルシアで最も歴史ある放送局で、チャンネル数も最多。ディアとレナが司会を務める人気トク番組『Girls Secret Love-story』もGMAの番組の一つ。

「実は俺もゲストとして番組に出ることになったよ」

「ほう。ガイアもついに業界入りか。先輩としてのアドバイスは目立ち過ぎず、控え過ぎず」だ

「そう心得るよ」

ガイアはレイカ言葉を心に刻んだ。

「レイカ先生、私もだよ」

「ロゼもか。まさか私のクラスにこんなにも多くの有望な人材がいたとは」

レイカは関心した様子だった。

「つーかロゼもゲストなの!？」

「そうだよ」

当然の如くディアは即答する。

「でもガイアも一緒に良かった。私一人だと緊張で壊れてたかもだよ」

「俺もロゼがいてくれて安心したよ。一緒に頑張ろうな」

「うん!」

二人の良い雰囲気を見てディアとレナは目元をひくつかせている。「とにかくもう行くよ、二人とも」

レナはわざとロゼの手を引っ張ってガイアから引き剥がした。

「ところでレイカ先生、何で移動するの？」

ディアがレイカにGMAのスタジオまでの移動方法を聞く。

「私の車で移動しようと思うのだけど。何かいい移動手段でもあるのか？」

「レナと二人の時はいつもサイバーワールド電脳世界経由で行ってるけど今日は先生の車に乗ってみたいな」

「それじゃあ私の車で決定だな。案内するからついて来てくれ」

レイカに言われた通りガイアたちは彼女について行く。雪がちらつく中、メイン校舎のクリスタルタワー中央棟三階玄関口とプレートを繋ぐ連絡ブリッジを浮遊歩行しながら一行は駐車場を目指した。

五人はクリスマススの装飾がされた針葉樹が立ち並ぶキャンパス内を五分程移動して教師用立体駐車場に着いた。三階までエレベーターで移動すると部活の関係でガイアも何度か乗ったことあるレイカの重力制御自動車が見えた。今年発売されたばかりのギアルシア社製の重力制御自動車『ヘルハウンド』の限定カラー。漆黒のボディにブルーのラインが入ったデザインで、定員は五人。

重力制御自動車とは名の通り重力制御によって浮遊する車。時空力を生み出すアギルレイヴ^{エンジン}永久機関を搭載しているため燃料の補給は行わなくもいい。

レイカは愛車のドアロックを解除するとガイアたちに乗り込ませた。助手席はガイアが座り、後部座席にはディアとレナとロゼが座る。車内はシトラスの香りで、レイカのハンドガン七丁、アサルトライフルが二丁置いてあった。

「ガイアは車の免許を取得しないのか？」

最後に運転席へ座ったレイカがガイアに聞く。

「俺はもう持つてるけど」

「そうなの？」

眼帯を外しつつ、レイカは車を内蔵人工知能によるオートドライブで発進させながら話を続けた。

ギアルシアの法律によって重力制御車と同じくアギルレイヴ^{エンジン}永久機関を搭載する空中移動を基本とするエアバイクは十五歳から、重力制御自動車は十六歳から免許を取得できる。そしてガイアは既に両方の免許を取得していた。

「一応持つてるけど車自体は持ってないよ」

「確かガイアはエアバイクで通学していたよな？」

「エアバイクの時もあるし、^{サイバーワールド} 電脳世界経由の時もある。たまに公共

交通機関を使うこともあるな。つまり気分次第」

「なるほど。ていうか電脳世界経由って怖くないか？ システムト
ラブルで肉体失う可能性もあるし」

電脳世界とは五百年前に提唱されたネットワーク上に創造された
立体空間のこと。それが実現したのは三十世紀に入ってから。この
空間には物質をデータとして記憶することが可能な他、物資の輸送、
人間の移動、一時的に人間が居住することもできる。現在は空間内
に電脳都市と呼ばれる都市機能を有した巨大空間も存在する。しか
し課題も多く、大戦によるサイバー難民の急増やデータの破損と劣
化、その他『ネット神隠し現象』などが問題となっている。現在ギ
アルシア、EU、南極エディード、北アメリカ自由連邦がそれぞれ
管理する四つの電脳世界が存在するが、混乱を避けるため各空間の
結合は実現していない。ちなみに電脳世界にはアクセススポットで
AIRSによる身分証明を登録することで誰でも簡単にアクセスす
ることが出来る。アクセスすることで身体をデータ化し、電脳世界
における仮の肉体とリンクすることで感覚を得ることが可能。

「へー、あのレイカでも怖いものあるんだー。レイカの弱点発見だ
な」

「うるさい、人間誰でも恐怖対象が存在するものだ」

レイカは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「レイカせんせ可愛い！」

「レナも教師をからかうな！」

後ろからレナもレイカをいじる。レイカはそのことから話を逸ら
すためミュージックプレイヤーを起動した。それと同時にへヴィメ
タルが車内に鳴り響いた。それを聞いた美少女三人は語らずともレ
イカの音楽の趣味に納得した。

以前からレイカのへヴィメタル好きを知っているガイアが曲を聞
きながら窓の外を見ると既に車は学園キャンパス外を飛行していた。
学園の外に出ると桜関の高層ビル群へ移動する。スタジオは第十六
階層の高天原たかまがはらにあるため中心部の軌道エレベーターを通過して四階層

上がらなければならない。

「ところでレイカ先生はGMAで何の仕事があるの？」

ロゼはレイカの校外での仕事に興味津々の様だ。

「ニュース番組へ軍事評論家としての出演の依頼があつてね」

「へー、私はあまりニュース見ないから分からないけど先生はいつも番組出演してるの？」

「んー、いつもって訳ではないけど他局も併せて月に五、六回依頼があるかな」

「すごい！先生もディアやレナと同じで有名人なんだね」

「まあな」

ロゼはレイカの違った一面を知って感動していた。

「先生が出演するなら今度から私もニュース見るね」

「その方が勉強になると思うからおすすめするよ」

こんな感じに車内で雑談をしつつ、五人はスタジオのある第十六階層・高天原へ向かった。

ガルト編 魔狼のパイロット

エディード連邦オーストラレーシア合衆国 ケープヨーク半島北端連邦軍基地停泊中のシルヴァーフォース所属 レオ艦隊旗艦『イブリース』 ミーティングルーム内

「これよりアジア共和国連邦が統治するニューギニア島を攻撃する。今回はマスターベテルギウスのスコープ艦隊、マスターレグルスのアクエリアス艦隊、そして私が指揮するレオ艦隊を投入し、敵軍基地へ三艦隊による総攻撃を仕掛ける。ファーストフェイズの作戦時間は12分、空中からの基地と敵地上部隊の攻撃及び空中戦。セカンドフェイズは敵陣への突入及び基地の制圧。これが今回のミッションプランだ。質問は無いか？」

オーストラリア大陸最北端、ヨーク岬のエディード連邦連合軍基地に停泊中のレオ艦隊旗艦『イブリース』内で開かれているシルヴァーフォースのマスターとコマンドーのみ集められたモルディブ条約機構軍ニューギニア島第四基地攻略作戦会議で今作戦の総司令官を務める片桐森羅將軍、通称マスターカノーpusがスクリーンの前で作戦の内容と注意点を語っていた。

モルディブ条約機構とはインド洋のモルディブシティで調印されたアジア・アフリカ地域の安全保障と軍事協力を目的とした条約。加盟国はアジア共和国連邦、シベリア共同体、大バビロニア・イスラム共和国、アフリカ連合の四力国。第四次世界大戦の三大勢力の一つで、現在条約調印国の連合軍がエディード連邦連合軍、南北アメリカ安全保障評議会軍と戦争している。ちなみにエディード連邦に所属する軍は連合軍、モルディブ条約機構の軍は条約軍、南北アメリカ安全保障評議会の軍は議会軍と呼ばれている。

「マスター、現在分かっている敵軍の情報を教えていただけませんか？」

席に座る一人のコマンダーが手を挙げて片桐將軍に聞く。

「偵察衛星『フリーズヴェルグ』で確認できた敵軍基地に配備されている機体はT型可変AIFのAF/F-260『黒龍』^{ヘイロン}が七百六十機と1型可変GRAの1/CJ47-E5『絶影』^{ジュエイン}が七十四機、2型の2/IR184F7『アグニ』二百九十七機、2/CU28 HZ4『戦雷』^{ザンレイ} 紅虎』^{ホンフイ}が百三十機だ。おそらく偵察衛星で確認出来ていない戦力も存在することが予測されるため、少なくとも今の情報以上の敵機体が存在すると認識してもらった方がいい。それと敵軍基地にはエースパイロット用に開発された1型、1/CW20-U3『無双』^{ウースラン}が配備されている可能性もあるため各自で警戒するよ

うに」

AIF。アーティフィシャル・インテリジエンス・フレームの略和名、人工知能外骨格。軍用ロボットから発展した完全人工知能制御によるアギルレイヴ^{エンジン}永久機関搭載人型兵器。屋内戦用の小型は武装オートマトンと呼ばれ世間ではゴレムと言う名で呼ばれる。人的消耗が全く無い上、全域対応で高性能なため、最も普及している兵器の一つ。種類も豊富で現在は世界中の戦場に配備されている。

GRA。ゲノム・リンク・アーマーの略。和名、遺伝子接続対応強化装甲。第三次世界大戦中に開発されたパイロットと機体を遺伝子レベルでリンクさせ、パイロットの身体能力を99.998%反映する人型装甲の総称。時空力を動力とするアギルレイヴ^{エンジン}永久機関を原動機として搭載する。現在は戦闘機^{ファイター}に変形可能なF型可変GRAや高速戦車^{タンク}に変形可能なT型可変GRAなどの可変タイプが主力となっている。

「なかなかの戦力だな……」

この作戦会議に参加しているブルーメッシュの銀髪に金色の瞳^{こんじま}を持つアクエリアス艦隊の若き司令官ガルト「エアルドレッド少佐、通称マスターレグルスは隣に座る紅の長髪に碧眼の戦友にしてスコ―ピオ艦隊司令官のヴェルノ「ブラッドレイ少佐、通称マスターベテルギウスに語りかけた。

「数はあつても所詮 A I F の黒龍と一世代前のアグニが主力。次世代の絶影^{ぜつえい}やエース用の無双^{むそう}の機体数は知れている。我々シルヴァーフォースの敵ではない」

ヴェルノは目を瞑ったままガルトに応える。

「とは言つてもオーストラレーシア軍とエディード正規軍の連合軍が三年戦つても決着がついてない戦いだ。一昨日派遣されたばかりの俺たちの一回の攻撃で陥落するほど条約軍も脆くは無いと思うのだが」

「随分と弱気だな。ゾディアークメンバーらしくない」

「相変わらず厳しいな」

「当たり前だ」

ヴェルノの言葉を最後に二人は黙って片桐將軍の言葉に耳を傾けた。

それからしばらくすると会議は終わり、ガルトとヴェルノは席を立ててミーティングルームの出口へ向かう。

「ベテルギウス、レグルス。今回も期待しているからな」

出口まで移動すると二人は老将の片桐將軍に声を掛けられた。凛々しい眼に健康的な肉体、綺麗に結われた髪を見る限り、片桐將軍を六十代と見る者は誰一人いないだろう。

「ありがとうございます、マスターカーネーパス。戦果にご期待ください」

「ご期待に添える戦果を残せるように全力を尽くします」

ヴェルノ、ガルトの順で片桐將軍に言葉を返した。

「頼もしいな。ではまた後、戦場で会おう」

そう言い残した片桐將軍はミーティングルームから出ていった。

「俺たちも戦いの準備をしなければならないな」

「ああ」

ガルトの言葉に一言で返したヴェルノはヴェルノが指揮するスコーピオ艦隊の方角へ歩いて行く。それを途中まで見送ったガルトも反対方向のガルトが指揮するアクエリアス艦隊へ向かった。

シルヴァーフォース所属　アクエリアス艦隊旗艦・イブリース級
『オケアノス』　司令塔内

「コマンダー・コーラ。第二種戦闘配置だ」

「はい、マスター」

ガルトに指示された部下のコマンダーは艦隊の兵士に第二種戦闘配置を指示する超音波放送を流した。シルヴァーフォースの兵士にはアンドロイド兵が採用されていないため、近距離における情報伝達はデータ送信ではなく全て超音波放送で行っている。

「二十一時四十三分にこの艦隊はニューギニア島のダルに向けて出発する。出発直後に第一種戦闘配置に変更、出発五分後には各GRAパイロットに機体を発進させ、各小隊ごとで決まった配置につかせる。多分出発二十分後には戦闘が始まるからな」

「了解です、マスター」

「それと今回俺はGRAパイロットとして戦うためこの指令塔にはいない。時々指示を出すことがあるかもしれないが、基本的にアクエリアスの旗艦・オケアノスは艦長代理のコマンダー・ルークに任せる」

「任せてください、マスター」

ガルトは艦長代理である部下のコマンダー、ルイス・ルークに戦艦オケアノスを任せた。

「それじゃ俺は先に行かせてもらおう」

そう言い残したガルトはオケアノスの指令塔を出る。

ガルトが向かう先は船内の格納庫。そこにはガルト専用GRA、1/YA-Z17『フェンリル』がある。指令塔から格納庫までは約二分、ガルトは時間を確認しつつ船内の廊下を歩いた。

「九時十七分。……あと十六分か」

「マスター！　どこに行かれるのですか？」

声が聞こえた背後を見るとガルトと同じフェンリル小隊に所属す

る女性パイロットのオリヴ＝エアハート中尉、通称コマンダー・エアハートの姿があった。金髪に桜色の眼をしたゲルマン系の若き女性兵士で、ガルトより二つ年上の二十一歳。

「先に船内から出ようと思って格納庫に向かっているところだけど、では私もお供させて頂きます」

「まだ第二種戦闘配置だ。出動には早い」

「マスターが出ると言うのに船に残るなど有り得ません！」

「分かったよ、……好きにしろ」

「ありがとうございます、マスター」

オリヴは小走りにガルトの隣まで移動すると歩幅に合わせつつガルトと並んで格納庫へ向かった。

「あのー、マスター？」

「何だ？」

「マスターって女性とお付き合いしていますか？」

オリヴは顔を紅潮させながら質問した。

「いきなりだな」

「その……、参考にさせて頂きたくて」

「そうか……、でも残念。俺まだ誰とも付き合ったことないから。でもオリヴみたいなお可愛い子と付き合ってみたいかな」

「えっ！？……その、……」

予想外の返答にオリヴはさらに顔を紅潮させる。多分初めてガルトにファーストネームで呼ばれたことも関係しているだろう。

「……冗談だつて」

「ひ、酷いです！ マスターの意地悪！」

「ごめん、そんな酷かったか？」

「はい」

「そうか、すまなかった」

オリヴはわざとらしく膨れっ面をしてガルトに見せた。

「そんなことより作戦中は恋いで悩むなよ。油断してたら死ぬぞ」「分かってますよー！」

格納庫前まで着いた二人はそのまま扉を開けて中に入る。

格納庫内ではメカニックアンドロイドたちが機体の整備を行っていた。

「お疲れ、アイリス」

「お疲れさまです」

ガルト、オリーヴの順にフェンリル小隊専用メカニックヒューマノイドのアイリスに声を掛けた。ナンバー507の女性型汎用ヒューマノイドで、性格は真面目で努力家、仕事中はいつもポニーテールにしている。デザインは自在変色する瞳に青と黒の髪の十七歳の少女。

「マスターにコマンダー・エアハート、こんばんはです」

オリーヴ用の1/F-S87『ワルキューレ』を点検していたアイリスは二人に挨拶した。

「アイリス、今すぐ俺の機体出せるか？」

「はい、問題ありません」

「いつも整備してくれてありがとう。作戦終了後に飯でも奢るよ」

「ありがたいですが私はマスターと違って有機物の吸収は不可能です」

「そう言えばそうだったな、じゃあ何か欲しい物買ってあげるよ」

「ホントですか!？」

「約束する」

「凄く嬉しいです！ 頑張ってくださいね」

アイリスは嬉しそうな表情でガルトを見送った。

ファイター
F形態の専用機・フェンリルの側まで移動したガルトは内蔵人工知能に指示してコクピットを開けた。

1/YA-Z17『フェンリル』。『魔狼』の異名を持つ。ギアルシアから輸入したガルト専用F型可変GRA。ギアルシアの試作実験機であるため一機しか生産されていない機体。ベースカラーはシルヴァーで起動すると機体各所にブルーライトラインが浮かび上がる。機体の装甲の素材は銀の反転物質であるオリハルコンと銅の

反転物質のミスリルの合金アスラメルス。メイン武器は背部に六本、両肩に三本ずつ装備した計十二本の大剣。第九世代アギルレイヴ^エ永久機関^{ンシ}のアギルレイヴ（シグマ）を原動機として搭載する。

アギルレイヴ永久機関。半永久的に時空力を生みだすことが可能なエンジン。時空力とはかつて人間からダークエネルギーと呼ばれていたものの一つで、二十六世紀から電力に変わって人間社会に普及したエネルギーのこと。空間における時間は膨大なエネルギーによって流れているという理論に基づき発見された時間を流すために必要なエネルギーの正体、それが時空力。時空力の性質は電力と同じく金属によく流れる、空間に放たれると光エネルギーを発する、圧縮によって重力の軽減、どのエネルギーにも変換可能などその他も多くの性質が存在する。時空力の生産には三つの方法があり、時間の流れを遅くしてその時間差分のエネルギーを取り出す停滞時間差式、自然な時間の流れから漏れ出るエネルギーを集める自然時間収集式、時間を速めるタイムクォーツと呼ばれる物質で無理矢理時間を速めてその時間差分のエネルギーを取り出す時空石発生式に分けることができる。ちなみにアギルレイヴ永久機関は時空石発生式でエネルギーを生み出している。その構造は高速回転により周囲の時間の流れを速める時空石^{タイムクォーツ}により真空の時間を速め、その時間差のエネルギーをコンデンサーに貯めて安定した時空力を供給する仕組みとなっている。

『こんにちは、マスター。もう出発するんですか？』

ガルトがフエンリルのコクピットに乗り込むと、オペレーターのレイチエル^リ「李^リ」ミューアヘッドの立体映像が現れた。

ツインテールの桃色の髪にリスのような金色の瞳、見た目に幼さを残す美少女で、男性兵士からの人気の高いオペレーター。

「ああ、特に理由はないけど少し早めに発進しておきたいですね」

『まったく。わがままなマスターですね』

「別にいいだろ。それよりハッチ開けてくれ」

『しょうがないですね』

レイチエルはため息混じりに応える。

『システム正常。ゲノムリンク完了確認しました。ユー　ハブ　コントロールです』

「アイ　ハブ　コントロール」

『1/YA-Z17、フェンリル。中央射出口より発進許可します』
「マスターレグルス、ガルトIIエアルドレッド。発進する」

『死なないでくださいね。私マスターが無事に帰ってくることを祈ってます』

「死ぬわけ無いだろ」

青い光のラインが浮かび上がったF形態のフェンリルは中央射出口の手前まで移動するとアギルレイヴ　の出力を高める。目の前の立体プレート映像の色がレッドからグリーンに変わった瞬間、ガルトはフェンリルを発進させた。

船外に出ると大雨が降っていた。夜襲には最適な天候ではあるが、今回は三艦隊も出動するため一瞬で敵にバレるだろう。

ガルトはF形態のフェンリルを操縦しつつ地上のアクエリアス艦隊を見た。アクエリアス艦隊はシルヴァーフォース第十二艦隊の別名で、旗艦のイブリース級全域対応戦艦『オケアノス』を始め、ジヤガーノート級全域対応戦艦が二隻、コロナ級全域対応巡洋戦艦が五隻、ラメール級全域対応空母が四隻、バトルシャーク級全域対応巡洋艦八隻、ミストラル級駆逐艦十二隻からなる艦隊。

『マスター、私を置いて行かないでください』

遅れてオケアノス船内から出てきたF型GRAのワルキューレに乗るオリヴの音声を受信した。

1/F-S87『ワルキューレ』。シルヴァーフォースの隊長機としてエディードの独立研究開発機関が開発した量産1型GLA。第九世代アギルレイヴ永久機関のアギルレイヴ（ロー）を搭載する。

「置いて行ったりしないよ」

ガルトは後方のワルキューレに返す。

『あ、ありがとうございます。……あの、またいきなりですけど』
「何？」

声だけ聞くとオリーヴは恥ずかしがっている様子だった。

『先程のマスターとアイリスとの約束、……私もマスターに何か買ってもらいたいです』

「そつだな……」

『ダメですか？』

「日頃からコマンダーにはお世話になってるからいいよ。ていうか何が欲しいの？」

『えーと、……特に無いですね』

「じゃあ約束は無効だな」

『そんなー！ ちゃんと有りますよ！ ……その、マスターとのデ

ート権がいいです……、はい……』

オリーヴの声は徐々に小さくなった。

「上司をからかうな」

『からかってないですう！ 私はただマスターとお出かけしたくて

……』

「一緒に出かける位なら別にいいけど、また今度な。そのときコマンダーの欲しい物も買ってあげるよ」

『本当ですか！？ 夢ではありませんよね！？』

「ああ、つーかミッシェン前なのに興奮し過ぎだコマンダー・エアハート」

「すみません、マスター」

アクエリアス艦隊上空を旋回していたガルトのフェンリルとオリーヴのワルキューレはレオ艦隊を挟んだ反対に停泊しているスコープ艦隊の旗艦『暁』から射出された機体を見て戦闘機型のF形態から人型のH形態に変形した。フェンリルのH形態は鋭角なフォルムで稲妻型のアイセンサーパネルの顔を持つ。ワルキューレより一回り大きく、接近戦に特化した機体。一方ワルキューレはV字型の

アイセンサーパネルで射撃、接近戦の両方に対応したバランスのとれた機体。

『マスターベテルギウスの機体ですね』

オリーヴの言う通りスコピオ艦隊旗艦の紅蓮から射出され、ガルトたちに近づくGRAはH形態のヴェルノ専用機1/YF-1100『カミカセ神風』だった。

1/YF-1100『カミカセ神風』。ヴェルノ専用F型可変GRA。『荒神』の異名を持つ機体。ベースカラーは赤。メイン武器は背部の四つのシールドブラスターに格納された四本の刀。第九世代アギルレイヴ永久機関のアギルレイヴ（プサイ）を搭載する。

『行動が早いな』

「前線で活躍したいからな」

ガルトはフェンリルとワルキューレの近くまで神風で移動したヴェルノからの音声に返答した。

『戦闘を好まないお前の言葉とは思えない』

「俺も軍人として成長したってことだ」

『果たしてどうか』

「見ろよ……、ヴァジユラ小隊だ」

戦友同士で語り合っているとレオ艦隊旗艦『イブリース』から片桐將軍率いるヴァジユラ小隊が出動していた。小隊の先頭には片桐森羅専用F型可変GRAのヴァジユラの姿があった。

1/YF-700『ヴァジユラ』。『黄金の神龍』の異名を持つ片桐森羅の専用機。ベースカラーはゴールド。メイン武器は背部のメガブラスタランチャー二門と二本の大剣。神風と同じく第九世代アギルレイヴ永久機関のアギルレイヴを搭載する。

『連邦最強のパイロットとその機体、どれ程の腕前が見物だな』

「今後のために是非参考にしたいところだ」

シルヴァーフォースへ入隊して以来数回しか片桐將軍と同じ作戦に参加したこと無かったガルトとヴェルノは今回の作戦で片桐將軍の戦術や戦闘方法を学ぼうと考えていた。

『マスター、もう少してミッション開始しますよ』

「分かっている」

オリーヴに言われた通り作戦時間までもうすぐだった。ガルトはミッションに備えて集中力を高め始めた。

ガルト編 魔狼のパイロット（後書き）

後日人物や兵器の設定画をupする予定です。下手ですが見ていただけると作者は嬉しいです。ご感想も随時お待ちしておりますm（

）m

設定画集（前書き）

登場人物が多く覚えにくいと思うので人物、兵器、風景の設定イラスト集を作りました。序々に増えていくので更新した際は活動報告とその時点での最終話の後書きにて報告します。

設定画集

設定画集

ここは作者が徒然なるままに描いた設定イラストをアップする空間です。

酷く醜い絵となっています。

ご了承ください

イラストの下には簡単な説明文もあるので是非。そしてネタバレ注意

> i 1 0 1 5 1 — 3 0 9 <

左からディアナ、ガイア、レナ、ロゼ

背景が死んでます

一応学校帰り

> i 1 0 2 1 9 — 3 0 9 <

レイア「クロート

ガイアのパートナーを務める本編メインヒロイン。ガイアが父から託された指輪状大容量記憶端末に封印されていた少女の姿をした人サイ型電脳生命体。運命の三女神の二柱の名を持つ最強の電脳生命体。『

Fates』の一体。自称女だが、一人称は基本的に『俺』。好物は人間の味覚で甘いと感ぜられる物全般。他の電脳生命体と異なり、実体化することが可能。

> i 1 0 1 5 2 — 3 0 9 <

片桐レナ

本編ヒロインの一人。ガイアの義妹で歌手、モデル、女優。名門片桐家の一人娘。実家は北太平洋統合連盟の首都・東京にある。現在はギアルシアの首都・第十二階層『桜関』のマンションにガイアと女性型汎用アンドロイドのワインと暮らしている。

> i10190 — 309 <

霧沢レイカ

ガイアのクラススの担任であり実弾射撃部の顧問。元ギアルシア軍契約兵士で、現在は軍事評論家としても活動している。見た目はただの不良だがかなりの実力者。

> i17878 — 309 <

ワルキューレ

ユーナ編 アルカディア皇家（前書き）

今回は序章でガイアと生き別れた姉のユーナの物語です

> i 2 4 6 3 5 — 3 0 9 <

ユーナ編 アルカディア皇家

第四惑星・火星 アーレア帝国 帝都アルカディア ラデル宮殿
女神の間

窓の外から吹き込むアルカディア海の冷たい風に美しい銀髪をなびかせつつユーナ「ヴァレンタインはエメラルドの碧眼で華やかな帝都を眺めていた。人形のように整った顔立ちに雪のように白い純白の肌。左肩の蝶のタトゥーから『妖蝶』という二つ名が付いている武装組織『アストレア』のリーダーである彼女の本当の名前は白皇院ユーナ。地球で起きたクイーンアイランドテロの生存者の一人でユーナ「ヴァレンタインという名は偽名である。

ユーナが現在いるここ帝都・アルカディアは火星北半球のアルカディア海北部に位置する火星最大の都市。人口はエディード連邦の首都・ラディアスバーレに次いで太陽系第二位。アーレア帝国の政治、経済、文化の中心地。帝都中心部にはアーレア皇帝の居住地であるラデル宮殿がある。

アーレア帝国。太陽系第四惑星『火星』全域を領土とする惑星国家。首都はアルカディア。人口三十六億七千万人の多民族国家。地球のエディード連邦と国交があるが、特にギアルシア企業国とは関係が深い。その他金星の惑星国家であるレヴィーラ、小惑星帯連合、人工惑星国家のヴァルフオーネス、木星衛星群連合、太陽内部地域のソルとも国交がある。二十七世紀後半までは共和制国家であったが、現在の政治体制は立憲君主制。二十四世紀の火星大移民時代から百年後の二十五世紀後半に地球の国々から次々独立した小国が吸収合併を繰り返して現在の体制となった。かつての共和制時代を共和制アーレアと呼ぶのに対し、現在は帝政アーレアと呼ばれる。国の主権を握る皇帝は終身制だが、元老院議会における不信任決議において三分の二以上の元老院議員の賛成により解任されることもあ

る。基本的に皇帝はアーレア市民権を持つ者であれば誰でも立候補することが可能であるが、伝統的に全国民に信頼されている名門アルカディア家の当主が代々当選している。現在もアルカディア家のアルドヘルム・ゼファイ・アルカディアが皇帝となっている。

「ユーナ様はアルカディア皇家の方なのですか？」

「それは今から分かるわ」

ユーナの隣に立つクリスタルブルーのショートカットに琥珀色の瞳の少女は不安の表情を浮かべていた。彼女の名前はリリス・サージエント。ユーナの妹分であり部下でもある武装組織『アストレア』のメンバーの一人。地球と火星の公転軌道の間を回る人工惑星の軍事国家、ヴァルフォーネス出身の強化人間でヴァルフォーネス軍部の実験被験体であった過去を持つ。人体実験生活から救い出したユーナのことを姉のように慕い、尊敬している。

アストレア。太陽系広域で活動している私設武装組織。アストレアとは正義の女神の名前。最高指導者は設立者であるユーナ。メンバーはそれぞれの正義を信じ、それに従って活動している。地球の巨大武装組織『反連邦統一戦線』を半壊させた『サハラ戦争』、軍事国家ヴァルフォーネスの兵器開発機関を破壊した『エリア073襲撃事件』、元南北アメリカ安全保障評議会長のスミス氏を暗殺した『5・21暗殺事件』など歴史に残る大事件に関与している。

「リリス、恐いの？」

「はい……」

「大丈夫よ。もし何かあっても私が全力でリリスを守るからね」

「ユーナお姉様！」

「こら！ 私の胸に抱き付かないでよ、……ああん。くすぐりたい」

「お姉様、とてもかぐわしいお身体です」

「もー、離れなさい」

無理矢理リリスを突き放したユーナは窓を閉めてソファアに座った。改めて部屋を見回すがやはりゴージャスに変わりはない。上品な薄い紅色に統一されたアルカディア建築のラデル宮殿の中でも一

際美しいとされる『女神の間』、ユーナたちは今そこにいた。リリスにとつてはラデル宮殿に入ること自体初めてであるが、ユーナにとつては母親の実家であるラデル宮殿の女神の間は懐かしく思えた。

「皇帝陛下のご入室だ」

ユーナが幼少の時代を思い返していると扉の隣の入室サインライトが光ると同時に懐かしい男性の声が聞こえた。

扉が開くと四人の皇帝直属兵隊『聖皇騎士団』の兵士が部屋に入る。それに続いて巨大な鎧兜を装備した人物と現アーレア皇帝のアルドヘルム皇帝が入室した。

「初めまして、皇帝陛下」

アルドヘルム皇帝の姿を確認したユーナはソファから立ち上がりつてその場にひざまずいた。

「その小娘！ 陛下の御前であるぞ！」

「はは、はいっ！」

緊張で立ったまま硬直していたリリスは兵士に指摘されて勢いで土下座した。

「やめなさい、お二人はまだ少女と言える年齢だ」

「し、しかし……。失礼いたしました」

皇帝に注意された兵士は言葉を慎んだ。

「お二人共、頭カブを上げなさい」

「はい」

皇帝に言われるままユーナとリリスは顔を上げる。金髪、翡翠色の双眸の持ち主である皇帝の威風堂々たる風貌にリリスは萎縮してしまう。

「すまないが君たち、四人で話をしたい。扉の外で待機してもらえるか」

「了解しました！」

一人の兵士が応えると四人の兵士は重装兵と皇帝、ユーナ、リリスの四人を残して部屋を出て行った。

アルドヘルム皇帝は扉が完全に閉まるのを確認して口を開く。

「二人共座っておくれ」

皇帝は立つたままユーナとリリスに座るように促す。

「皇帝陛下。この度は……」

「ユーナ。本当に生きていたのだな」

ユーナが十三年ぶりに会った祖父のアルドヘルム皇帝を見ると涙を堪えている様子だった。

「こんなに美しい娘に成長して……」

「おじいちゃん！」

堪え切れなくなったユーナは祖父の胸に抱きついた。その光景を後ろで見っていたリリスは啞然とする。一方重装兵は事情を全て知っているかのような振る舞いだ。

「ずっと会いたかったよ」

「私もよ。おじいちゃん」

アルドヘルム皇帝は孫娘の長く美しい銀髪を優しく撫でる。それから少しの間抱き合った二人は離れてソファーに座った。

「ユーナは本当に母親にそっくりだな」

「そうかな？」

なぜか祖父のその言葉はユーナにとって照れくさかった。

「とてもルシアンナ様に似ていますよ」

扉の外で入室宣言して以来黙っていた重装兵が口を開いた。彼のことにはユーナも昔からよく知っている。三百年もの間アルカディア家を守り続けてきた男性型汎用アンドロイドのギルディオンⅡ「ロージングレイヴ」、通称ロージングレイヴ公爵。人面の頭部は持たず漆黒の鎧兜と一体化したデザインとなっている。太陽系最強のアンドロイドで聖皇騎士団の最高騎士長も務める。代々の皇帝に忠義を誓い、帝国の英雄として国民に親しまれてきた存在なのだ。GRAパイロットとしても有名で専用機のAE・G/CF-Z2『コキユートス』は戦場に出動するだけで敵は恐れ戦くと言われている。『ギルディオンさんまでそんなことを言うなんて』

「本当のことを言ったままでです」

「ところでそちらのお嬢さんは？ モニカの面影があるが」

アルドヘルム皇帝はリリスのことをユーナに聞いた。

「彼女は私の部下のリリス。残念ながらモニカではないです」

「リリス」サージエントと申しますです。出身国はヴァルフォーネスです」

「実は彼女はヴァルフォーネス軍部の人体実験の被験体だった過去があつて、エリア073事件の時私が助け出したんです」

「ユーナ様は私の恩人なのです。このご恩は一生かけてお返しするのです」

「なるほど……。お嬢さんにも辛い過去があつたのだな」

「今はユーナ様と暮らせて幸せなのです」

「そうかそうか、それは良かった。ユーナ、リリスちゃんのことを大切にするんだよ」

「勿論です」

ユーナはアルドヘルム皇帝の言葉に当然の如く応えた。

「よろしい。それと私から幾つかユーナに訊きたいことがあるのか」

「何でしょうか？」

「敬語は止めてくれ。昔のように話して欲しい」

「……うん」

「で、本題なんだが。ガイアとモニカの所在は確認出来ていないのか？」

最初にアルドヘルム皇帝はユーナの弟と妹の所在を訊いた。

「あれ以来探し続けているけれど生きていることすら私にはわからないわ」

「そうなのか……。私もあのテロ事件以来ずっとユーナとガイアとモニカをロージングレイヴ卿とその部下たちに極秘で探させたのが会えたのはユーナだけだ」

アルドヘルム皇帝はソファーに座ったまま瞳を閉じて俯いた。

「あのー、先ほどから耳にするガイアとモニカって方は誰なんですか？」

二人で話し込んでいたアルドヘルム皇帝とユーナにリリスが質問する。

「ガイアは私の実の弟で、モニカは私の実の妹なの」

「そうなんですか！ 私はずっとユーナ様は一人っ子なのだと思っ
ていましたですよ。すいません、勝手に私が思い込んで……」

「いいのよ。私がアストレアのメンバーに話していただいただけから
「でも……」

「ねえリリス？ 地球で起きたクイーンアイランドテロって知って
るかしら？」

「はい。詳しくは存じませんが訊いたことはあります」

「私はその事件の生き残りの一人なの。そこでガイアとモニカとば
らばらになっただけ。だから二人が生きてるなんてわからない」

「ユーナ様にはそんなことがあったのですか」
リリスは下を向いて悲しい表情になった。

「でももういいの。あの事件からもうすぐ十年だし、私はアストレ
アのリーダーとして過去に捕らわれ続ける訳にはいかないから」

「……ユーナ様」

感動したリリスの涙腺は勝手に緩み、涙で溢れた。

「しかしユーナよ。良い知らせもある」

アルドヘルム皇帝の言葉にユーナは耳を傾けた。

「どんなこと？」

「グレンとルシアンナ、つまりユーナの両親は生きてる」

「本当に!？」

「ああ、ただし身体は使い物にならない」

「植物状態ってこと？」

「近いな。正確には半サイバーゴースト状態だ。身体はギアルシア
島第八地下階層・マリンエデンに安直されている」

「……そうなんだ」

完全ではない親の状態を訊いてユーナはあまり喜ぶことができなかった。

サイバーゴースト。 电脑世界に入ったまま本物の肉体が寿命や病気で死んでいる状態、もしくはそのアバターのこと。 一般的にオリジナルの肉体を持たないゴーストは物質データの更新ができないため、時間の経過による劣化に伴い自然消滅する。 ただし例外としてオリジナルをネットに配信することにより常にリンクし続け电脑世界上で永遠の命を手に入れるサイバーノイドと呼ばれるゴーストの種類も存在する。 彼らは環境の変化によって独自の進化を遂げ、ホモ・サイバーネンシスという学名で呼ばれる人間とは別の種族となっている。 三十年前に制定された电脑世界における国際法ではサイバーノイドの急増を阻止するため新たにサイバーノイドになることを禁じた。 そのため現存するサイバーノイドは非合法な事例を除き全員が三十歳以上となっている。 そして半サイバーゴーストとは身体は存在するもののその身体が使い物にならないがために意志だけをデータ化した存在のこと。

「あまり喜んではない様子だな」

「だってサイバーゴーストなんて死に損ないみたいなものじゃない！」

「確かにユーナの言ってることは理解できる。 しかしだな、二人はちゃんと意志を持って生きているんだ」

「でも！ ……」

「もついい、話題を変えよう。 ただ気が向いたら二人に会って欲しい。 それだけだ」

「……ごめんね、おじいちゃん」

「いいんだよ。 それよりだいが質問から脱線したからもとの話題に戻す。 二つ目の質問だが、先日の連絡で私はユーナがアストレアのメンバーだということを知った。 そのことだが、なにゆえテロ活動をしている？」

「それは、世界を正しい道に導くため」

「そのような自分勝手なきれいごとを理由に犠牲者が出てもいいと思っっているのか？」

アルドヘルム皇帝の言葉は鋭い槍となってユーナの心を突き刺した。

「そんなことは……、でも私は私の正義を信じて活動しているの！他のメンバーだって同じ！みんなそれぞれ正義があるから行動できるの！それに私たちは自分たちのことをテロリストだなんて微塵も思っていない！ 勇気ある民兵が腐った政府と、無差別殺人を行う武装組織と、暴走する軍部と戦ってはいけないの！？」

暫し二人の間に沈黙が流れる。だがアルドヘルム皇帝が先に口を開いた。

「ハハハハ、そうかそうか。それなら大丈夫だな」

「へ？」

アルドヘルム皇帝の反応を見てユーナは呆気に取られた。

「ユーナよ。私は復讐に捕らわれているのではないかと心配していたんだ。復讐は無意味な殺し合いの連鎖を生み出す極めて邪悪な存在だ。復讐に捕らわれてしまえば混沌カオスを創造する破壊者となるだけだ」

「……、おじいちゃん」

アルドヘルム皇帝の言葉を聞くと同時にユーナの心は安心感が広がる。

「とはいえ私はアーレア帝国の代表である皇帝という立場だ。私の家族に武装組織のリーダーがいるとなれば国際的な信頼を失うと共に国の混乱を招くこととなるだろう」

「そのことは私も十分理解しているつもり。だからあの事件以来九年間もおじいちゃんと連絡を取らなかつたの」

ソファアから立ち上がり窓の近くへ移動したアルドヘルム皇帝は帝都を眺めながら口を開いた。

「本当の私の気持ちとしてはユーナにはアルカディア家の次期当主そして次期皇帝となってアーレアを治めてほしい。アストレアに所

属するとすれば必然的に危険も伴う。私は大切な孫娘に安全で幸せな生活を送ってもらいたいんだ」

「気持ちはあるがたいけど今の私には大切な仲間がいるから……、彼らを見捨てるわけにはいかないの」

「……ユーナがそう言うことは最初から私にも分かっていた。別に無理矢理ユーナを止めるようなことはしない。だがこの老いぼれの気持ちを心のどこか空いた隙間にも置いてくれると嬉しく思う」

アルドヘルム皇帝は窓際からユーナたちの近くへ戻ると透明でガラス棒に似た大容量記憶端末を目の前のローテーブルの上に置いた。

「おじいちゃん、これは？」

「私の気持ちだ。中には北アレーアの電子通貨ではあるが五十億口レアと限定生産に加え未発表の帝国軍製アンドロイド兵士『アサシン』 ロールアウトカラー』三百体の秘密保管施設の場所、ユーナに味方する者の連絡先が入っている。必要な時に使うといい」

「こんなことして大丈夫なの？」

「それは私にも分からない。ただ今回の面会は極秘だからな。身内にも語ることは禁止だ」

「分かった。リリスもお願いね」

「勿論です！ 今日の出来事は例え拷問されようと絶対に誰にも教えません！」

「ユーナには頼もしい義妹がいて羨ましいな」

「そんなことないですよ。ユーナ様にはいつもご迷惑をかけてばかりなのですよ」

皇帝に褒められたリリスは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「日々頑張ってるリリスちゃんはもっとユーナに甘えるといいよ。」

それと最後にユーナに訊きたいことがあるのだが、アストレアの歴史や規模、実態を教えてくださいませんか？ ここで聞いた情報は漏らさないことを約束する」

「……わかったわ。可能な範囲で教えるね」

少し考えたユーナはアルドヘルム皇帝の要望に応えることを決めた。

「私が七年前に父さんの遺産を利用して創設した組織がアストレアの原点。最初は武装組織ではなくて政治団体だった。正体を隠しながら活動する幼い指導者として私は聖女のように扱われて、それに注目してくれた人たちがスポンサーになってくれたの。その後組織は急速に巨大化していった。一部の政治家にとっては目障りな集団になってしまったみたい。そして五年前に開かれたラディアスバーレでの組織の総会でエディード武装警察に政治犯、テロ活動という偽りの罪状を突きつけられて組織は崩壊した。その一年後には第四次世界大戦が始まり、再度集まった元組織のメンバーで話し合った結果武装して戦うことが世界を変えるには一番有効な手段と判断したの。そこで武装組織アストレアは創設された。設立までの経緯はこんな感じ。規模は現在約二万二千の人間と四千のアンドロイド、一万四千のアトラスがメンバーとして太陽系中にいるわ。中には政治家や芸能界の人もいるのよ。そして所有しているゲノムリンクアーマーは約千二百機あるけどアストレアではAIFは作業用以外導入してないわ。だいぶ簡略したけどこれでどうかしら？」

「ありがとうユーナ。おかげで大体把握できた。それにしても私が想像していた規模より遥かに巨大な組織だな」

アルドヘルム皇帝は何か考え込んでいる様子だった。

「陛下、そろそろお時間です」

背後に立っていたギルディオオンが時間を催促する。

「まだまだ話していたいところだがこれ以上はお互いの立場を考えると喜ばしいことではない。ロージングレイヴ卿に案内させるから二人は卿について行くといい。あと扉の外で待機する四人の兵士は私に任せてもらおう」

「そうだね。短い時間だったけどおじいちゃんと会えて嬉しかったよ。また来るね。あとこれはおじいちゃんに返します。気持ちだけで嬉しいから」

ユーナはテーブルに置かれた記憶端末を手で取ってアルドヘルム皇帝に差し出した。

「受け取っておけ。老いぼれにはこの程度のことしかできない。せめて孫娘の手助けをしたという自己満足くらいさせてくれ」

「おじいちゃん……、ありがとう」

別れが近づくとともにユーナは段々自分の瞳が熱くなるのを感じた。視界が霞むと同時に頬に熱い物が流れる。

「私はいつでもユーナの味方だからな」

涙を流すユーナをアルドヘルム皇帝は優しく抱き寄せた。

「ごめんなさい。心配掛けちゃって。九年間も行方をくらすなんて私バカだよ。こんなにもおじいちゃんは心配してくれていたのね。でも私怖かったの。両親もいないのにアルカディア家に帰ったら迷惑掛けるし優しかったおじいちゃんも私のこと嫌いになっちゃうかもって。こんな自分勝手な孫娘だけとおじいちゃんはまだ私のこと嫌いじゃない？」

「当たり前だ。ユーナのことは昔から変わらず大好きだよ」

「私も昔から優しいおじいちゃんが大好き」

ユーナは大粒の涙をこぼしながらアルドヘルム皇帝の体に抱きついた。ユーナには皇帝の体が細く弱々しく感じた。

「いつでも歓迎するから来たい時に来なさい。そして困った時は迷わず相談しなさい。いいね、ユーナ」

「うん！」

皇帝に耳元で囁かれたユーナ元気返事をした。

「さあもう行きなさい。この面会が公に広まれば大変なことになる。ロージングレイヴ卿。二人を頼んだぞ」

「Yes , Your Majesty .」

アルドヘルム皇帝の命令にギルディオンが応える。

「リリスちゃんもまたユーナと一緒においで。私はいつでも待つてるから」

「はいですー！」

「それじゃあ、おじいちゃん。私もう行くから」

「ああ。死なないでくれよ」

「わかってるよ。さありリス、行きましようか」

「はい！ ユーナ様」

アルドヘルム皇帝と別れの挨拶を交わしたユーナとリリスはギルディオンの続いて女神の間の扉を出た。

「こちらですユーナ様」

女神の間を出たユーナとリリスはギルディオンに案内されるまま窓から差し込む光に照らされる淡い紅色に統一された廊下を歩く。

それはユーナがラデル宮殿で暮らしていた十三年前と変わらない光景だった。

「女神の間までは誰に案内されたのですか？」

廊下を歩きながらギルディオンはユーナに質問する。

「案内人はいなかったわ。それに私は三年間もここで暮らしていたのよ。そもそも不法進入者である私たちに案内人がいるわけ無いじゃん」

「確かに。ですがどうやって警備兵に見つかること無く女神の間まで移動したのですか？」

「あれ、公爵は知らないの？ ラデル宮殿には隠し通路があるってこと」

「知りません。初耳です」

「意外だなー。三百年も宮殿に仕えているのにね」

「宮殿内はスキャンできない素材でできているので」

「へー、じゃあ教えてあげようか？ 多分私のおじいちゃんも知らないと思うよ。幼い時、従妹のシェリーと遊んでたら偶然発見したの。以来そこを秘密基地にして遊んでた。そういえばシェリーは元気にしてる？」

ユーナの言う従妹のシェリーとはアルカディア家の次男の娘、シエリー・イシュラ・アルカディアのこと。ユーナとはかつては大親友の仲だった少女。

「公式発表ではユーナ様は亡くなっていることとなっているのでそれを知って暫くは毎晩のように泣いていました。でも現在はユーナ様にも劣らぬ立派な美女に成長なされましたよ」

「そうなんだ。すごく会いたいな……。おっと、入り口はここ」

会話している間に一行はユーナの言う隠し通路とやらの出入り口に着いた。一見するとただの壁である。

「ここに指を掛けると、ほらね」

ユーナが壁の装飾の溝に指を入れると鍵が解除される音が聞こえた。見ると足元に大人一人がやっと通れる程の穴が開いている。

「じゃあ私たちはここから外に出るわ」

「見送りはここまでで大丈夫でしょうか？」

「うん。今度公爵もこの隠し通路使ってみれば？ 他にもいろんなところに入り口があるから人に見つかりたくない時とか便利よ」

「そうですね。緊急時などの利用は考えておきます」

「それではギルディオンさん、私のおじいちゃんをお願いするね」

「Yes, Your Highness」

「リリース、先に入って」

「はい。ロージングレイヴ大公、ありがとうございます」

ユーナに先に入るように促されたリリースはギルディオンに挨拶した。

「ご丁寧にありがとうございます。ユーナ様のことお願いします」

「任せてください」

「そう言い残したリリースは隠し通路へ入って行った。

「ギルディオンさん、さようなら。また来るわ」

「いつでもお待ちしております」

ユーナの姿が完全に見えなくなるまで見送ったギルディオンはアルドヘルム皇帝のもとへ向かった。

第一章 4 ファーストキス

西暦2295年6月13日。

この日、三百年間続いた太陽系第三惑星『地球』の惑星国家であるエディード連邦は分裂した。一年前の太陽風による経済の混乱が原因でエディード連邦加盟国であったアジア共和国連邦、シベリア共同体、ロシア共和国、大バビロニア・イスラム連合国、アフリカ連合が同時に独立したのだ。

独立の翌月にはインド洋のモルディブにてモルディブ条約が締結され独立した国々は軍事的結束を強める。当時世界中に点在していたエディード連邦加盟国の北アメリカ自由連邦の駐屯軍を強制追放する。

それに対抗して北アメリカ自由連邦は南アメリカ、北極地域と共に地球圏での戦争を禁じていたエディード連邦を脱退して南北アメリカ安全保障評議会を設立し、モルディブ条約機構軍と全面戦争となった。これが第四次世界大戦の幕開けである。

人型遺伝子結合強化装甲兵器・ゲノムリンクアーマー、通称GR Aと人工知能外骨格、通称AIFを投入した両軍の戦力はほぼ互角だった。こうして戦争は長期化し、被害額も莫大なものとなった。一方、その頃エディード連邦に残っていたEU、オーストラレーシア合衆国、北太平洋統合連盟、月面都市連合、南極のエディード本国では連邦再編の動きが高まっていた。そして大戦が始まった翌年北太平洋統合連盟と月面都市連合を除く南極エディード、EU、オーストラレーシア合衆国はエディード連合軍を編制し大戦への介入を宣言した。これによって戦争は更に拡大し、他の惑星国家にも影響を及ぼすこととなる。

大戦が始まって四年経った現在。条約軍、議会軍、連合軍の戦争はまだ終結していない。

駐車場でレイカと別れたガイア、ディアナ、レナ、ロゼは番組スタッフ数名と合流してスタジオに向かっていた。

「初めまして、お兄様。私はレナとディアのマネージャーのアイと申します」

「どうも、片桐ガイアです」

スタッフに混じって歩いていたレナとディアナのマネージャーがガイアに挨拶した。見た目は二十代の女性だが、瞳の色が絶えず変わり続けていることからアンドロイドだということが分かる。

「アイさんはアンドロイドですよね？」

「はい。もしかしてお兄様はロボット嫌いですか？」

「いいえ、我が家にも一人いますよ」

ガイアの言葉を聞いたアイは安心した様子だった。ちなみにガイアの家には女性型汎用アンドロイドのワインが使用人として暮らしている。

「お兄様の言葉を聞いて安心しました。今日に限らずこれからもよろしく願います」

「こちらこそよろしく願います。それといつも妹が迷惑かけてるみたいなので…」

「迷惑掛けてないし」

ガイアの言葉を聞いたレナが透かさず反論する。

「本当か？」

「本当だもん！ そうだよね、アイ？」

「うーん、どうかしら。レナは結構わがままだから」

「そんなことないよ！」

レナは必死に弁解する。

「まあディアよりは絶対わがままだな」

「私もお兄様に同感です」

「お兄ちゃんもアイもそうやってすぐレナのこといじめるんだから！ いいもん！ どうせレナはわがままな子だもん！」

ガイアとアイに攻められたレナは拗ねた。

「よしよし。レナはいい子だよ」

一部始終を見ていたロゼはレナの頭を撫でて励ました。

毎回見ていて必ず慰め役を担うロゼに対してガイアは単純に尊敬してしまう。

「ところで俺は何をすればいいんですか？」

誰にも詳しい内容を聞いていなかったガイアはアイに訊ねてみる。

「そうですね」。お兄様は番組自体は見たことありますか？」

「まあ、一応」

「それなら大丈夫だと思います。いつもの番組の様にゲストとして出演してレナとディアと会話してもらえればいいかと」

「了解です」

「あ、でも気をつけてくださいね。結構暴走する番組として有名なので。かつては突然ゲストと月に行ったことかもありました。それも番組の醍醐味なので頑張ってください」

「はい……、なんとか対応してみます」

悪意無きスマイルのアイを見て、ガイアはそう答えるしかなかった。

それから会話している内にGMAの敷地内の空中連絡通路を歩いていた一行はスタジオがあるGMA社第二タワーの前まで来ていた。GMAの敷地は広大で、その敷地は第十六階層の三分の一の面積を占めている。そのため移動にも時間が掛かるのだ。

ちなみになぜGMAがそんなに広いのかと言うとあらゆるジャンルのドラマや映画を敷地内で撮影するためにあらゆる環境を再現しているからだとか。実際敷地内には人工火山、人工林、人工海、都市、草原、人工砂漠などあらゆる環境が一箇所に凝縮されている。中には化石に残った遺伝子を使って復元された古代生物研究施設や

ギアルシア島の海底から湧き出る温泉などがあり総合レジャー施設として機能していたりする。

「ねえガイア、緊張してる？」

スタッフと話し終えたディアナがガイアの左隣に移動して声を掛けた。アイはディアナと入れ替わるように前を歩くスタッフのもとに移動して会話を始めた。レナとロゼは最前列で二人で会話している。

「当然だろ。メディア出演初めてなんだから」

「そうだよ。じゃあ私がガイアの緊張ほぐしてあげる」

「は？……………」

立ち止まったディアナは突然ガイアの首にキスした。ガイアは首に当たるディアナの柔らかい唇に全てを吸い取られる様な感覚を覚える。

「ちよつと、ディア…………。こんなところで」

ディアはガイアの首から離れる前に小さな舌を出してガイアの喉を舐めた。

「どうだった？ 緊張とれたでしょ？」

ガイアから離れたディアナは小悪魔っぽくガイアを見つめる。

「逆に緊張するだろ」

「これが英国式緊張のほぐし方」

絶対嘘だ。この時ガイアはそう確信した。でも嬉しかったのは事実。

「お兄ちゃんどうしたの？ 顔が赤いけど」

ロゼと会話していたレナが不思議そうに訊いてきた。どうやら今の出来事に気づいていなかったらしい。その反応を見てとりあえずガイアとディアナは安心した。

「べ、別に何も無いけど…………、それより今俺たちどこに向かってるの？」

「スタジオだよ。先にスタッフ全員に挨拶するから」

「いきなりスタジオか。緊張するな」

「大丈夫。お兄ちゃんにはレナが付いてるから」

「……やっぱり不安」

「もー！ なんで？ せっかくレナが付いてあげてるのに」

こうしてガイアたちの長い金曜日の夜が始まった。

タワー最上階 G i r l ' s S e c r e t L
o v e - s t o r y S t a j i o

G i r l ' s S e c r e t L o v e - s t o r y。略して『
ガルシラ』。GMAの人気番組の一つで、レギュラーは学生アイド
ルのディアナとレナ。基本はトークだが、毎回ディアナとレナのわ
がままで暴走する生放送番組として知られる。番組は毎週金曜七時
から九時の二時間だが、レギュラーメンバーのわがままで最高七時
間まで延長したこともある。毎回ゲストを招き、ゲストのあんなこ
とやそんなことまで聞き出してしまう子供には刺激の強すぎる番組。
そして今回のゲストであるガイアとロゼは番組のスタジオにいた。

「凄いねー、ガイア」

「そうだな」

業界人ではないガイアとロゼは呆然と目の前の光景を見ていた。
まずスタジオ自体が小型飛空艇で空に浮いている。五十人程座れる
客席の前には自宅の大型A I R Sで受信した番組立体映像でよく見
るディアナとレナが座る大きなソファがあった。そして四方の壁
が透明な素材で作られているためそこからは金色の夕陽によって輝
く雲海が見える。雲と雲の間からははるか下の広大な太平洋が広が
っていた。それは普段ガイアが第十二階層で見慣れている雲海とは
少し違っている。

「二人とも何してんの？ 見とれてないで番組関係者と挨拶しない
と」

レナに注意されたガイアとロゼは番組関係者と挨拶して回った。

一通り挨拶が終わるとガイアとロゼは客席の最前列に座った。

「ディアとレナは今から楽屋に行くから一旦お別れするね。ガイアとロゼはスタッフにゲスト用の楽屋に案内させるから」

ガイアとロゼの目の前に立つディアナはそう告げるとレナと共に移動を始めた。

「次会うときは本番前だからそれまで二人共心の準備しておいてね」
レナもそう言い残すとディアナに続いてスタジオを後にした。

「俺たち大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。きつと」

緊張が高まる二人はお互い励まし合う。

その後二人は番組スタッフに案内されてゲスト用の楽屋に移動した。

ゲスト用の楽屋前

元々ガイアとロゼの部屋は別々だったが、ロゼの要望により二人で一室を使うこととなった。そのため二人は『片桐ガイア様』と映るドアの前にいる。

部屋のキーデータを保存しているAIRSでガイアはドアのロックを解除した。部屋に入ったガイアとロゼは荷物を置いた後ローテーブルを挟んで黒い皮のソファに座った。室内はモダンで統一され、巨大な鏡や大型AIRSに接続された立体映像投影スクリーンなどが置いてある。

「やっぱり全然慣れないね」

「ああ。ディアとレナの凄さを痛感する」

部屋はベッドを取り除いたホテルの一室を拡大した感じだった。

「七時まであと五十分もあるよ。何する？」

「あと四十分だろ。番組開始十分前には移動しないと」

「確かに。そうだよな」

「まあそれまで適当に世間話でもしておけばいいんじゃない？」

「うん、そうしようか」

それから暫くガイアとロゼはどうでもいい世間話で時間を潰した。

「あ！ そう言えば……」

雑談を始めて十五分程経った時、急にロゼが何かを思い出した。

「どうした？」

「私たち制服で番組出演して大丈夫なのかな？」

「俺には分からないけど。多分大丈夫だろ」

「うーん、やっぱり不安だからディアに連絡してみる」

そう言っつてロゼは通学鞆からAIRSを取り出して通話機能でディアに訊ねてみた。机に置かれたAIRSから映し出された立体映像のディアが言うには別に制服でも大丈夫らしい。しかしディアはあとでガイアとロゼの服をコーディネートしてゲスト用の楽屋に持っていくとだけ言い残して通話を切った。

「ていうかディアが服持つて来ても着替えること出来ないじゃん」

「なんで？」

「なんでって……、ロゼは女子だし」

「へー、ガイアって女の子に着替えるところ見られたくないの？」

「俺は別に大丈夫だけど、……ロゼは恥ずかしいだろ？」

「まったくガイアは変態さんだなー。私が着替える時はガイアが部屋の外で待機するだけで解決だよ。それともガイアは私が着替えるところを見たいのかな？」

「……見たくないと言えば嘘になる、かな？」

「じゃあ見せてあげようか？」

ロゼはガイアの隣に移動して腕に抱きついた。

「……あのー、ロゼさん。正気ですか？」

「もちろん。だってディアに負けたくないもん」

「へ？」

「ディアにこんなことされたんでしょ？」

いきなりロゼはガイアの首に口付けした。

「『なんでこのことを？』って感じの顔だね。ガイアは私のこと人間ではないってこと分かってる？」

ガイアが首から離れたロゼの大きなふかふかの耳を見てその意味が分かった。アトラスの聴力は人間の十倍以上なのだ。

「もー！ かわいいなー、ガイアのその顔。焦ってる感じが私をきゅんとさせちゃう」

「あれはだな……」

「言い訳はダメ。全て聞こえてたんだから。レナに報告して欲しくないなら私と続きをして」

聴力だけであの状況を把握出来るのか？、という疑問はあったがレナに報告となればガイアにとって厄介なことになる。多分お小遣い停止＋昼食抜き＋一週間位無視されることは確実だ。

「……続きと言いますと？」

「んー、そうだねー。まずはキスから」

「キキキス！？」

「うん、それがダメならいきなり本番行っちゃおう？」

なぜかガイアにはいつもよりロゼが妖艶に見えた。

「ていうかロゼってそんな大胆な子でしたっけ？」

「私だって思春期の女の子。異性の興味はちゃんとあるよ」

「へー、そうなんですか……」

「それで？ どうするの？ キス？ それとも……」

「キスにさせていただきます！」

「わお、いいお返事。じゃあキスするから動かないでね」

ロゼはガイアの膝に跨るように座ると正面からガイアの顔を見つめた。ロゼの顔は紅潮し、ふかふかな尻尾がガイアの膝で盛んに動いている。アトラスは興奮すると尻尾を盛んに動かすと書かれてい

たデータを讀んだことをガイアはふと思い出した。

「大好きだよ。ガイア」

ロゼは目を閉じてガイアに顔を近づける。ガイアも意を決してファーストをロゼに託すことにした。

「二人共お待たせー！」

突然勢いよくドアが開き、そのあとにディアナが部屋に入ってきた。

惜しい！ いや、救われたのか？

「ななな何してるのよー！！！」

ディアナは男湯にワープミスしたかのように顔を真っ赤にした。

「あらら、ディアに見つかっちゃったね。私たちが恋人であるということ」

嘘は良くないよ、ロゼさん。

「恋人！？」

「嘘だ！」

ガイアは動揺するディアナに弁解する。

「でも今二人でキスしようとして……」

「おかしいなー、ディアがそんなこと言えるのかなー？ 私に黙ってガイアの首にキスしてたのに」

「な、何で！？」

「アトラスはとっても耳がいいんだよ？」

ロゼはわざとらしく大きな耳を動かして見せた。

「どお？ お互いレナには秘密にするってことで」

なにやらロゼがディアナに交渉を始める。

「……分かった」

交渉は一瞬で成立した。

「でも私まだキスしてないから今からするね」

言い終えた瞬間ロゼの唇はガイアの頬に触れていた。

第一章 5 芸能界

「……長い、長すぎる」

結局ガイアは楽屋の部屋の外でロゼが着替え終わるまで待機していた。

そしてなぜか部屋の中からはロゼとディアナの色っぽい声が聞こえてくる。

本当まったく二人で何してるのやら……

部屋の中を妄想しかけたガイアであったがAIRSのメール受信音で我に返る。

「こんな時に」

メールフォルダを開いて確認する。送り主はロゼの双子の弟、アラステア。ヴァレリウスだった。アラステアは青い毛並みと長めの尻尾を持つアトラスでガイアとは中等部からの親友でもある。愛称はステア。なにより驚くのは彼が誰から見ても美少女にしか見えないう容姿の持ち主であること。そのためたびたびロゼの妹だと間違えられる。

『ロゼの居場所知らない?』

メールの文面にはそう書いてあった。

『近くにいるけどどうかしたか?』

ガイアはすぐに返信する。

返信からわずか十五秒。

アラステアからメールが返る。

『マジで!? 今どこ? 家のセキュリティ改造したらマスターキー以外で家に入れなくなっちゃったorz ロゼがマスターキー持つてるから家に帰って来てって頼んでくれないかな』

『ロゼに直接頼めよ ていうか絶対ロゼ帰らないと思うけど』

『なんで!? それに今ロゼと喧嘩してるんだって お願いだからロゼの交渉してよ』

『無理だな 今からロゼとゲストとして番組出演するから まあ俺の家にでも行ってるよ ワインに連絡しておくから』

『とりあえずそうする 今からガイアの家に行くからワインさんに伝えておいて』

『了解 ちなみに今日はロゼとディアもいるからな』

毎週金曜日はディアナとロゼが片桐家に泊まることとなっていることを思い出したガイアはアラステアに伝えた。

『気にするな』

アラステアの返信を確認してガイアは自宅にいるメイドとして働くアンドロイドのワインに事情を説明するためAIRSのアドレス帳開いて通話機能を起動した。

『お呼びしましたか？ ご主人様』

ガイアの目の前にワインレッドの髪の毛美少女メイドの立体映像が現れる。それと同時に脳へ直接語りかけてくるようなワインの声が聞こえた。とても美しく、声優のような声だ。

「今からアラステアが来ると思うから家に入れてあげてくれないか」
『了解しました』

「それと今日は俺もレナたちと番組出演するから帰宅遅くなると思う」
『う』

『お嬢様からお聞きしたので既に存じております。頑張ってくださいね』

「ありがとう。それじゃあまた後で」

『はい。それでは失礼します』

目の前でワインが両手をお腹の辺りで重ねて一礼すると立体映像は段々消えていった。

「ガイア！ 入っていいよ」

ワインの姿が消えて間もなく、部屋からディアナの声が聞こえた。どうやらロゼの着替えが終わったらしい。

ガイアは目の前の扉を開ける。

扉を開けるとすぐ前にディアナとロゼが立っていた。いろいろあ

つてすぐに部屋を出たためディアナのドレスアップした姿を一瞬しか見ていなかったガイアは改めてディアナを見て、その妖艶さに見とれてしまった。

普段ツインテールにしているブロンドの髪は下ろし、見慣れた制服姿は黒いワンピースに変わっている。メイクも普段と違い、全体的に大人びた印象だ。

一方先程着替えたロゼは全身白いレザーで統一されたクラシクなファッションとなっている。白のレザーとロゼの淡紅色の髪と尻尾が絶妙に調和して可愛さを高めている。あくまでガイアの個人的見解であるが露出が多くてエロい。ディアナにメイクし直されたのか、ロゼも普段と雰囲気違っていた。

「そんなに見ないでよ。恥ずかしい」

「ごめん」

二人に見入っていたガイアはロゼに声を掛けられ我に返る。

「ディアたちに見とれちゃったの？」

「……そんな訳ないだろ」

「本当かなー？ 顔が赤いよ？」

「うるせえ。着替えるから二人とも部屋出る」

「やっぱりそうなんだー」

「いいから出ていけ！」

ガイアは二人を無理矢理部屋から追い出すと、ディアナが鏡の前に置いていた衣服を手にとる。

何も考えることなく機械的に更衣を済ませたガイアは楽屋をあとにした。

番組スタジオ裏

ガイアとロゼはスタジオの入り口で待機していた。番組は既に始まっていてレナとディアナの会話が扉の向こうから聞こえてくる。

「緊張してるの？」

ロゼの両手に右手を握られたガイアは自分の手が震えてることに気づく。

「そうかもしれないな、ロゼは大丈夫なのか？」

「緊張しないわけではないけどこういうのガイアよりは慣れてるか」

「なんで？」

「私もレナやディアみたいにとある業界で注目されてるの」とある業界？」

ロゼは握っていたガイアの右手を離した。

「何の業界か知りたい？」

「もちろん」

「でも今は教えてあげないよ。ガイアに直接言うの恥ずかしいし。それにこの番組はゲストの過去や趣味のトークが必ずあるから、その時分かると思うよ」

「そう言えばそうだったな」

ここでガイアは深刻な問題に気付いてしまう。レナも含めてガイアは自身の過去を誰にも教えたことが無いのだ。当然この番組で本当の過去を語ることなど絶対にしない。

「これは罠か？ 罠なのか？」

「急にどうしたの？ 変な独り言呟いて」

「大変なことに気が付いた」

「大変な、コト？」

ロゼは人形のようにカクツと首を傾げた。

「詳しくは説明できないけど結構ピンチ」

ガイアはすぐに脳内で偽りの過去を構築し始めた。

「よく分からないけど、……もしかしておトイレに行きたいとか？」
「なわけあるか！」

ツッコミを入れつつガイアは自分の過去のシナリオを懸命に考える。

「すみません、もうすぐお二人に登場していただきます」

スタッフの一人が二人に報告する。

「マジかよ」

過去設定は案外なんとかかなりそうだが、問題は家族であるレナと会話が噛み合うかということだ。おそらく少しでも矛盾が生じればディアナに総攻撃されてしまう。ガイアがそんなことを考えているとスタッフからゴーサインが出た。

「本当に行かなくてよかったの？ がまんは体に悪いよ」

「だからトイレ違いますから、ロゼさん」

ガイアは目の前の扉を通る直前に右手人差し指に填めたリングを額に当てて気持ちを落ち着かせる。これは昔から大きなイベントの前には必ずやっているガイアにとっては儀式の様なもの。こうして心をリラックサさせたガイアはロゼと共に表舞台に出た。

観客からガイアとロゼの姿が見えた瞬間から歓声があがる。

明度と雰囲気の変化に圧倒され、いきなり胸が高まるのを感じたガイアは観客を見て芸能界の華やかさを肌で感じた。

観客席からはガイアに対して黄色い声援を送ってくれる女性も少くない。

そしてさらにガイアが驚かされたのはロゼの人気だった。いわゆるオタクと呼ばれる民族が全力で彼女を崇拜している。

それに応えるためロゼはステージの前まで駆け足で移動するといきなり演説を始めた。

「みんな！ 集まってくれてありがとうー！ いつか私の下僕にしてやるぜ」

ウインクを決められオタクたちは「有り難き幸せー」とか言いながら彼女に膝まづく。

その光景を後ろで見ていたガイア、ディアナ、レナは圧倒されてしまう。ていうか豹変し過ぎだった。

「ん？ どうかしたの？」

振り返ったロゼは何も理解していなかった。

「とりあえず座りなよ」

レナ勧められてガイアとロゼはローテーブルを囲むU字型ソファに座った。席順は右からレナ、ガイア、ロゼ、ディアナという配置で座っている。これから約二時間ひたすら会話が続くこととなるのだ。

「では改めて本日ゲストを紹介しまーす！ レナのお兄ちゃんの片桐ガイアとロゼ」

レナは元気よくカメラに向かってガイアとロゼを紹介した。それに続いてガイアが挨拶する。

「どうも、よろしくお願いします」

礼儀正しく頭を下げるガイアに観客から歓声が湧く。

「知ってる人もいるみたいだけど知らない人は初めまして！ ロゼ」

「ヴァレリウスです！」

ロゼに対して女性からは『可愛いー』とか騒がれている一方で『ロゼたん』コールが響いていた。

「てなわけでプライベートでも親密な四人だからいつもの感じでいいよね？」

「そのほうがいいでしょ」

ディアナの提案にレナが賛同する。

「じゃあとりあえずいつものあのコーナー始めちゃいますか？」

「そうだね」

ディアナとレナが話を進めていると四人の目の前に立体映像が浮かんだ。

『お二人とも、初めまして。番組アシストAI（人工知能）のカトリーナです。』

人の顔の形に変わった目の前の立体映像が語り掛けてきた。これは番組用に開発された人工知能、カトリーナ。必要とする情報を瞬時に検索したり、リアルタイムで番組と視聴者を繋ぐ役目を果たしている。ちなみに今から始まるうとしてるのはカトリーナがゲストに対し、質問攻めするコーナー。そのことを知っているガイアに

とつて最初にして最大の難所であった。

「初めまして」

ガイアとロゼが同時にカトリーナに挨拶する。

「二人とも知ってると思うからサクサク質問に答えちゃって。じゃあカトリーナ、お願いね」

『了解です』

レナにお願いされたカトリーナはガイアとロゼに対して質問を始めた。

『まずは基本的な質問から始めます。お二人の年齢と出身を教えてください。片桐様からお願いします』

「年は十七歳、北統連の横浜出身です」

実際はギアルシア出身だがちゃんと偽りの戸籍通りに答える。先程から脳内シミュレーションしていたガイアにとつてこの程度は攻略可能だ。ガイアが答え終わるとロゼに続く。

「私も同じく十七歳で、出身は第零階層です」

『お二人とも実家には度々帰られるのですか？』

「俺は一年に一回くらいかな。日本は近いけどレナの仕事がほぼ一年中ありますからね」

「私は月一くらいの頻度で帰ってるよ。両親がギアルシア軍に所属してるからなかなか会えないけど」

「へー、ロゼの両親って軍人さんだったんだ！ 知らなかった」

「軍人と言えるのかは分からないけどお父さんが地上軍のコックでお母さんが宙域軍のオペレーターなんだよ」

意外な職業に思えたのかディアナは驚いていた。

「確かレイカがペルシアでロゼの父親と会ったことがあるって前言ってたな」

ガイアは以前部活動中に顧問のレイカから聞いた話を思い出した。

『レイカさんとは軍事評論家の霧沢レイカ様のことですか？』

「ええ、一応俺たちのクラスの担任なんです」

ガイアに説明されたカトリーナはポーカーフェイスのまま納得し

たよつな仕草を見せて質問を続ける。

『なるほど、そういうえば霧沢様は教職にも就かれていましたね。では質問を続けます。次は視聴者からの質問です。第六階層にお住まいのA・N・さん十六歳、女性のから片桐様への質問。最近ネットで片桐ガイアさんのことを知ったのですが、片桐さんはどんな方なんでしょうか？ 調べてみても詳細な情報が無くてただカッコいいとしか載ってませんでした。とのことです』

「えーと、俺は桜関学園の中等部普通科五年で射撃部所属のただの学生です。そしてなぜ今日この番組に招かれたのか未だ疑問だらけです」

『片桐様、どうやらご自身がどのような人なのかよく分かってない様子ですね』

「まあ、そうですね」

『いいでしょう。あなたの情報を検索して見せてあげましょう』

そう言うかとトリーナは情報検索を開始した。

『結果ができました。世間一般ではアイドル、片桐レナのイケメンお兄さんということとでネットを中心に多くのファンがいるみたいです。非公式ながらファンクラブも存在します。有名なたきっかけは約半年前のディアのブログで紹介されたことです。ちなみに現在約四千三百万人が片桐様を何らかの方法で知っているという統計が出ました。おそらく今回の番組出演によりその数値はすぐにも変動するでしょう』

「四千三百万!？」

『あくまで統計ですが』

正直立場的に有名になりたくは無かったガイアであったが、ここまで知られてしまったからには仕方がない。どうせ有名になったのならこれからはそれなりに有効活用させてもらうことにする。

「知らないうちに有名にしちゃってゴメンね」

原因を作ったディアナは申し訳なさそうに謝った。

「でもよかつたじゃん! こうしてレナと仕事出来るんだから」

そう言つてレナはガイアの腕に抱きつく。

「そうだな。喜ぶべきかもな。ありがとう、ディア」

「え？ ……うん、ディアは何もしてないけど…」

予想外の展開にディアナは困惑した。

『片桐様に納得していただいたところで次の質問です。次はアジアのシンガポール在住の永遠の独身二次元ファイターさん二十五歳、男性からヴァレリウスさんへの質問です。ロゼたんいつも応援します！ 質問ですが、ロゼたんが聖域（オンラインゲームの三次元フィールド）に降臨される時間に法則はありますか？ いつも仕事から帰宅して聖域に入国するのですがなかなかロゼたんに会えませんorz もし法則があるなら教えていただけませんか？ それと妹のステアたんもですがいつメジャーデビューするんですか？』

???

カトリーナが読み上げた質問を聞いたロゼ以外の三人の頭に最初にか浮かんだのはそれだけだった。

「はい？」

レナとディアナにいたつては一瞬カトリーナが故障したのかと勘違いした。ガイアも暗号が多すぎて解読不能だった。一方全く戸惑つてない様子のロゼは質問に答える。

「うーん、とくに法則がある訳では無いけれどあえて言わせてもらうなら学校から帰宅した後の時間帯かな。具体的には午後十時から翌日の三時あたり。休日はさすがにランダムだけど。もちろんギアルシア標準時だからグリニッジ国際標準時+9hだよ。ちなみに現在は『王国物語』のアレグレイディア帝国バラノス地方の新ダンジョン、テューレイ地下宮殿を攻略中だからその近くで会えるかもね。それとステアは妹じゃなくて弟だから。メジャーデビューのことは今のところ考えてません」

『ご回答ありがとうございます。でも他の三人は全くついて来てないみたいですね。三人に理解していただくために私がヴァレリウス様のことを教えましょう』

カトリーナはガイアの情報を検索した時と同じようにロゼの情報検索を始めた。

『まず世間からはハードゲーマーアトラス美少女姉妹ということで知られています。とは言っても妹と言われているアラスデア様は弟ですが、容姿が女性が妬いてしまうほどの超絶美少女なのでそのように認識されているらしいです。統計では全世界のオタクを中心に約九千二百万人の人が知っています。ヴァレリウス姉弟が注目され始めた原因は三年前、当時攻略不能とされていたオンラインゲーム、パラダイス・ロストの裏ダンジョンのアズラエルの無限螺旋階段を攻略したことです。その後も多くのゲームで難攻不落ダンジョンやインポッシブルなミッションを攻略していき業界では神とまで呼ばれるようになったとか。さらに男の娘と美少女という条件が人気を爆発させて現在にいたるといふことです』

ガイアは番組に出演する直前のロゼとの会話を思い出した。つまりあの時ロゼがガイアに言っていた業界とはオンラインゲーム業界のことらしい。

「なるほど、さっき言ってた業界っていうのはゲーム業界のことか」「そういうこと」

「ていうかロゼって普通に凄いじゃん。一億人近い人たちに知られるとか芸能界入っても全然大丈夫だよ」

レナは自分のことのように興奮していた。

「でも私は忙しい生活は嫌だから。徒然なるままにゲームしながら生きたいの」

「えー」

「無理は言わないけどロゼが望むならディアたちが全力でサポートするからね」

「うん、ありがとうディア」

ロゼはディアナの厚意を心から感謝した。

ちょうどこの時スタッフからCMのサインが送られたためフリートークとなった。約一分間のフリートークの後はカトリーナの質問

が再開する。

それからいろいろな会話やコーナーで盛り上がり番組の収録は順調に進行していった。

第一章 5 芸能界（後書き）

前回の投稿からかなり時間が経ってしまいました（汗
というのも大学受験を控えているのでなかなか執筆の時間がとれな
かったんです。

読者様がいるかどうかは定かではありませんがいたら申し訳ないです。
すいませんでした。そしてお待たせです。

今回は夏休みに仕上げていた原稿を一通り確認したものです。まだ
夏休みに仕上げた原稿はありますがチェックする時間があまりない
ので受験が終わるまで投稿できないかもしれません。
こんな感じですがこれからよろしく願います。

兵器一覧(前書き)

以前宣言しておいた兵器一覧です。まだ地球圏の有人兵器だけなのでちょっとずつ無人兵器や地球圏外の兵器も追加していこうと思います。

兵器一覧

30世紀末の兵器について

まず形式番号については、スラツシユの前の数字は型を表す。0

〜3まであり、それぞれ

0型は別名H型でH形態からの変形が出来ない機体。
ヒューマノイドフォルム

1型は別名F型でH形態からF形態ファイターフォルムに変形出来る機体。

2型は別名T型と呼ばれH形態からT形態タンクフォルムに変形出来る機体。

3型は別名B型と呼ばれ、B形態ビーストフォルムからH、F、T形態の各形態に

変形出来る機体を意味する。

スラツシユの後に続く文字は各機体のF形態とT形態における形式番号を示している。

これまでの解説は人が搭乗する機体における形式番号のことで無人戦闘機やヒューマノイド用搭乗戦闘兵器、大型ロボット兵器は含まれていない。

ギアルシア

地球圏各勢力とアーレア、レヴィーラの軍事技術を吸収し、更に独自の技術を応用して開発された強力な兵器を多数保有する。そのため少ない兵員ながら一勢力並みの軍事力を持っている。

契約軍

ギアルシアの国防軍であり、世界各地へ契約によって派遣される軍隊。民間軍事会社のようなシステムで成り立っており、依頼があれば兵士は世界各地へ送り込まれる。ただし第四次世界大戦は不参加のため派遣はしていない。

1 / A - G 1 3 1 ブレイド

ギアルシア社製量産攻撃機型。

1 / U - G 6 7 1 ナイトメア

ギアルシア社製次世代汎用機型。

神々の黄昏

ガイアが結成した武装組織。最先端機ばかりが採用されており、少数ながら軍隊並みの影響力を持つ。

1 / Y U - Z 2 0 ラグナロク

ギアルシアの研究機関で開発された最新試作機でありガイア専用機。世界初、アギルレイヴを搭載。同時代では圧倒的性能を誇る。

1 / Y F - M 2 2 ミラージュ

レイアの専用機。極限までチューンした結果同時代では世界最速の機体となった。圧倒的なステルス機能を有し、同時代のリーダーでは感知できない。

1 / Y A - Z 1 7 フェンリル

ガルト専用機。ガイア専用機、ラグナロクと同系列の機体。接近戦に特化しており、巨大な剣を十二本装備している。

1 / X F - E 1 4 インフェルノ

ユーナ専用機。ギアルシア軍とアーレア軍の技術を取り入れた試作実験機。

1 / Y F - M 2 0 アビス

レイカ専用機。ミラージュと同系列でステルス、レーダー性能が高い。

連合軍

エディード連邦に残ったエディード、EU、オースラレーシアの各国軍事機関によって結成した連合軍。ただし北太平洋統合連盟軍は参加していない。最後に大戦へ参戦したため最も被害が少ない。技術レベルは三勢力の中でトップ。

シルヴァーフォース

連合軍最強の軍隊。兵士はエリートばかりで、最先端の機体を多く採用している。アンドロイド兵とヒューマノイド兵が採用されていない。

1 / F - S 8 7 ワルキューレ

シルヴァーフォース指揮官用戦闘機型。

> i 1 7 8 7 8 — 3 0 9 <

1 / B F - S 8 4 ハイドラ

シルヴァーフォース量産爆撃戦闘機型。

1 / A F - S 5 6 ブレイズ

シルヴァーフォース新型量産機。

1 / A F - S 5 6 N ブレイズ ナイトレイド

マスターミラの専用機。ブレイズの派生機。

1 / X F - 8 8 . 4 ブレイズ シュトラール

マスタースピカの専用機。速度を重視したブレイズの派生機。

1 / XF - 88 . 4 ブレイズ インビジブル

マスターアルタイルの専用機。ステルス性能を重視したブレイズの派生機。

1 / XF - 88 . 4 ブレイズ バルムンク

マスターベガの専用機。接近戦に特化したブレイズの派生機。

1 / YF - 700 ヴァジュラIEI

秘密機関、アークで開発されたマスターカノープスの専用機。全身が金色で戦場でも一際目立つ機体。性能はフェンリルに並ぶ。

1 / YF - 1100 カミカゼ 神風

シルヴァーフォースと片桐重工が共同開発した機体。背部のシールドアームコンテナが特徴的。マスターベテルギウス、ヴェルノの専用機。

1 / YF - N930 シラヌイ 不知火

川崎重工で開発された試作機。零紅の専用機。

エディード軍

エディード連邦大統領が管理する軍。シルヴァーフォースに対してエディード正規軍と呼ばれる。

1 / F - Ed147 ドレイク

エディード軍旧世代主力戦闘機型。

1 / F - Ed147E ドレイクテイル

エディード軍主力戦闘機型。ドレイクの強化派生機。

1/F - Ed147S ドレイクホーン
ドレイクテイルの兄弟機。ドレイクテイルに比べ接近戦仕様になっている。

2/Ed : RT612 ジャベリン
エディード軍主力軽戦車型。

2/Ed : HT278 デスブリンガー
エディード軍主力重戦車型。

3/C - Ed1126 コクーン
インセクトに変形する3型の輸送機型。

EU軍

スピードを重視した機体を多く採用しているヨーロッパの軍隊。
サハラ砂漠では条約軍、大西洋と北極海では議会軍と戦闘している。

1/F - EU108 ワイバーン
ユーロファイター社製量産戦闘機型。

1/F - EU112 ワイバーンII
ワイバーンの性能を高めた派生機。

2/EUT450R ツラトルク
EU軍主力軽戦車型。

オーストラレーシア軍

条約軍に対してエディードを防衛する上で重要な役割を担う軍隊。兵器の多くは輸入だが、同じ連合軍であるエディード軍と共同で戦闘している。

2 / UST39R ブラスタ

日輪をベースに開発した派生機。

条約軍

三勢力の中では兵員が最も多く、中心国家であるアジア共和国連邦は強大な軍事力をもつ。技術面で若干遅れがあるものの圧倒的物量で他勢力を凌駕する。

アジア共和国連邦軍

条約軍最強の軍。技術的にも最先端で、技術レベルにおいては他の条約軍が足を引っ張る形となっている。特に2型の技術は最高峰で軽戦車型、重戦車型共に世界で最も信頼されている。

1 / CF60 - E9 フォンレイ 風雷

条約軍主力量産戦闘機型。

1 / CJ47 - E5 ジュエイン 絶影

風雷をベースに上海航空工業会社が開発した次世代量産機。

1 / CW20 - U3 ウースワン 無双

ブレイズを超える性能を誇る条約軍の次世代機。配備数も少なく、エアパイロットしか利用できないのが現状。

2 / I R 1 8 4 E 7 アゲニ

ア連軍旧世代主力軽戦車型。接近戦用に開発された。

2 / C R 1 8 4 F 3 狩人^{リエレン}

ア連軍旧世代主力軽戦車型。ザンレイは後継機に当たる。

2 / C U 2 8 R Z 戦雷^{ザンレイ}

アジア工業集団公司在開発した条約軍主力軽戦車型。多くの派生機が存在し、2型においては世界最高峰の性能を誇る。

2 / C U 2 8 R Z A 近接戦闘型戦雷^{ザンレイ} 双刀^{スワンタオ}

戦雷の接近戦に特化した派生機。二本の大型バイトを装備している。

2 / C U 2 8 R Z S 高機動型戦雷^{ザンレイ} 神速^{シエンスウ}

戦雷の高機動型派生機。

2 / C U 2 8 H Z 4 重戦車型戦雷^{ザンレイ} 紅虎^{ホンフー}

戦雷の重戦車型派生機。

2 / C H 1 2 6 Y 2 破軍^{ホーシユン}

条約軍旧世代主力重戦車型。

大バビロニア・イスラム連合国軍

1型を輸入に頼る一方でアゲニを独自派生させた強力な火力を有するイフリートが量産されているため重力圏では十分な軍事力を持っている。

2 / R S 3 0 I イフリート

アグニをベースに開発した量産軽戦車型。

2 / R S 3 0 I S イフリート改

イフリートを強化改造した機体。

A U 軍

条約軍の重要拠点多く存在するアフリカの軍。2型は生産していないため条約機構加盟国家からイフリートや戦雷を輸入している。

0 / A U A 9 1 F 3 スリーピイホロウ

ヒューマノイドフォルムから変形機能が無い0型。頭部が無いのが特徴。主に南部の密林地帯で使用されている。

1 / F - A U 5 0 9 タロン

アフリカ航空宇宙局が開発した量産戦闘機型。

議会軍

無人兵器の技術においてトップに立つ北米が中心の一勢力。アンドロイド兵とヒューマノイド兵の採用数は世界一。無人戦闘機も大量投入しており、ロボット軍団という別名までついている。

北アメリカ自由連邦軍

かつてのアメリカ合衆国の高度な軍事技術を継承しており、無人兵器分野は独走している。

1 / F - 3 1 4 ツイスター

ボーイング社が開発した量産戦闘機型。

1 / F - 3 1 4 E ストライクツイスター
ツイスターの強化派生機。

1 / F - 3 1 4 S サイレントツイスター
ストライクツイスターの強化派生機。

1 / F - 3 2 2 ファング

ロッキード・マーティンが開発した議会軍主力戦闘機型。ブレイ
ズウイスタンや無双に並ぶ性能を誇る。

1 / F - 3 2 2 E ストライクファング
ファングの強化改造機。

1 / B F - 2 6 6 デルタサイクロン
エア・エース社製量産爆撃戦闘機型。

1 / F - 3 3 5 サイクロン
エア・エース社製量産戦闘機型。

1 / B - 1 6 5 ブリザード
ボーイング社製の議会軍主力爆撃機型。

2 / R 5 8 D 2 バジリスクエィ
議会軍主力軽戦車型。

2 / H 4 6 S 7 ストームイーター
議会軍主力重戦車型。

M Q - 1 5 5 0 スカイシャーク

ボーイング社製無人戦闘機。主に戦闘機型のサポートをする。

MQ-2000 ファントムX4

議会軍の次世代無人戦闘機。単独で任務をこなす。

その他の勢力

ロシア共和国軍

かつてアメリカ合衆国と対をなしていたロシア連邦の軍事力を継承している強力な軍隊。

1/MiG-227 ミコヤン・グレヴィッチ ロマノフ

ロシア航空機製作会社が開発したロシア共和国軍主力戦闘機型。

1/Su-231 シャドウランサー

スホーイ・カンパニーが開発した次世代機。

2/Sp46J8 ジルニトラ

ロシア共和国軍主力軽戦車型。

2/Mc97T4 チエルノボグ

ロシア共和国軍主力重戦車型。

AIC2Y レーシー

スホーイ・カンパニーが開発した無人戦闘機。

北統連軍

旧日本の技術を中心とした機体を開発しており、優れたステルス

性能技術を有する。

1 / F - N 4 4 6 シアン 紫電

新日本技術開発機構が開発した量産戦闘機型。

1 / U - N 2 2 1 クモガクレ 雲隠

片桐重工が開発した次世代汎用機型。ステルス性能に優れ、世界で唯一『幻増』技術が備わっている。

1 / B - N 1 7 0 ムラサメ 村雨

三菱重工が開発した量産爆撃機型。

2 / R T 5 8 M 4 ニテリン 日輪

川崎重工製の軽戦車型。

2 / H T 3 8 G 7 オロチ 大蛇

三菱重工が開発した重戦車型。

スイス軍、新十字軍

永世中立国のスイスとローマトリックが管理する新十字軍。両軍共に密接な関係で兵器の共同開発を行っている。

1 / F - R S 1 7 パラディン

ブルクハルト社とローマトリックが共同開発した戦闘機型。

2 / R S T 2 W 3 ソロネ

ブルクハルト社とローマトリックが共同開発した軽戦車型。

人物一覧 2

アラステアⅡヴァレリウス

Alastair Valerius

種族 ホモ・アトランティア

性別 男

出身 ギアルシア 第一階層・わだつみ

生年月日 西暦2982年4月23日

職業 桜関学園中等部普通科四年生

血液型 A型

瞳 アクアマリン

髪 ミルキーブルー

射撃部部員にしてガイアのクラスメイト。ロゼの双子の弟だが見た目が美少女であるため常に妹と間違えられる。オンラインゲーム業界では姉のロゼと共にアイドルとして崇められている。入部審査が厳しい射撃部に入部できたのはオンラインゲームで養った戦闘技術のおかげらしい。

リユー
メイリャン
劉 美蓮

Melilian Liu

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 ギアルシア 第十一階層・天京
テエンジン

生年月日 西暦2983年2月3日

職業 桜関学園中等部三年生

血液型 B型

瞳 ライトブラウン

髪 黒髪と紅髪のツートン

射撃部でマネージャーをしている中華系ギアルシア人の美少女。

父親は南方航空会社の社長でもある。常に明るい性格でガイアは先輩であると同時に憧れの存在。部内では蓮の日本語読みである『レイン』と呼ばれている。

ヴァレンティナ「ローゼンフェルド

Valentina Rosenfeld

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 ロシア共和国 サンクトペテルブルク

生年月日 西暦2982年11月24日

職業 桜関学園中等部三年生

血液型 AB型

瞳 紅

髪 パールホワイト

射撃部に所属するガイアの後輩であるロシア出身の美少女。感情表現に乏しいが言いたいことはしっかり主張する性格で先輩であるガイアに対しても鋭い一言をサラリと言ってしまふ。愛銃はロシア製のスナイパーライフル、SVV-97“Vorotnikov”。狙撃の腕前はガイアを凌ぐ。

メリッサ・オックスフォード
Melissa Oxford

種族 ホモ・エクシミアス
性別 女

出身 北アメリカ自由連邦 ニューヨーク

生年月日 西暦2982年5月4日

職業 桜関学園中等部芸能科四年生

血液型 O型

瞳 ミントグリーン

髪 ブルーメッシュのブロンド

ガイアの同級生で射撃部に所属するニューヨーク出身の美少女。幼少時代から銃愛好家の父親に銃の扱いを教えられていたため射撃の腕前はかなりのもの。将来の夢はアクション映画の主演女優になることらしい。

アラン・コルトレーン

Alan Coltrane

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 AU 南アフリカ州 ケープタウン

生年月日 西暦2982年3月31日

職業 桜関学園中等部四年生

血液型 B型

瞳 マリンブルー

髪 ブロンド

ガイアのクラスメイトであり悪友。兄はマフィア関係者。見た目

は不良、やることも不良だが仲間への心遣いは人一倍。サッカー好きでマンチエスターユナイテッドの大ファン。

オリヴ＝エアハート

Olive Earhart

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 エディード連邦 南極 ラディアスバーレ

生年月日 西暦2979年6月2日

職業 エディード連邦特殊戦術兵隊・シルヴァーフォース アク

エリアス艦隊フェンリル小隊所属パイロット

階級 中尉

血液型 O型

瞳 桜色

髪 ブロンド

ガルトと同じアクエリアス艦隊のフェンリル小隊に所属している女性パイロット。ラディアスバーレの連邦上級士官学校を卒業した後、ドレーク海峡海戦での活躍を認められシルヴァーフォースにスカウトされた。年下の上官ガルトに恋している。

シエリー＝イシュラ＝アルカディア

Cherie Ishula Arcadia

種族 ホモ・エクシミアス

性別 女

出身 アーレア帝国 アルカディア地方 帝都アルカディア
生年月日 皇暦378年7月10日
職業 アルカディア皇家第一皇女 聖皇騎士団所属騎士
階級 少佐、聖騎士
血液型 A型
瞳 ライトグリーン
髪 シルバーとブロンドのツートン
専用機 AI1CF-E74 ゼフィロス
アーレア帝国第一皇女にして皇帝直属である聖皇騎士団のメンバー。ガイアやユーナの従妹。剣術に秀でており帝国式二刀剣術を使
いこなす。性格も良く、容姿端麗のため帝国ではアイドルのような
存在。

ギルディオン＝ロージングレイヴ

Gildeon Roseingrave

種族 汎用ヒューマノイド
性別 男性型
出身 皇立レイヴァース研究所
製造日 皇暦41年12月1日
職業 聖皇騎士団最高騎士長
階級 総帥、最高騎士長
爵位 公爵
形式番号 EHU-004Z
専用機 AI1CF-S54Z タイラント
アーレア帝国歴代皇帝に仕えるヒューマノイドの老将であり帝国
最強の軍人。シェリーの師でもある。彼の発言の国民への影響力は
大きくアーレア皇帝に並ぶ力がある。彼を敵にすることは帝国を敵
にするのと同義。

リリス＝サージエント
L i l l i t h S a r g e n t

種族 ホモ・エクシミアス
性別 女

出身 ヴァルフォーネス エリア077

生年月日 西暦2983年1月21日

職業 アストレアメンバー

血液型 O型

瞳 琥珀

髪 クリスタルブルー

デザイナーベイビー、クローンが合法である軍事国家ヴァルフォーネスで行われた強化人間計画。その被験体であった少女。ユーナに保護された後はアストレアのメンバーとなる。ユーナの妹分。

ファン フォエロン
黄 輝竜
H u i l o n g H u a n g

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 アジア共和国連邦 華南地方 グワンソウ 広州

生年月日 西暦2973年7月2日

職業 ア連地上軍第6師団及びMTO多目的上級航空部隊・無双
隊所属パイロット

階級 少尉

血液型 A型

瞳 ゴールド

髪 クラシックブラック

専用機 1 / CW20 - U31 無双ドラゴンカスタムウイスタン

2 / CU28HZW 重戦車型 戦雷ザンレイ 紅虎カスタムホンフー E I

ア連軍のエースパイロット。無双隊では二番目に若いが副隊長を務める。真面目な性格で仲間の不正も許さない。国家の繁栄の為に尽くし、自分が信じる正義を貫く。

周ゾウ 小桜シャオイン

X i a o y i n g z h o u

種族 ホモ・エクシミス

性別 女

出身 アジア共和国連邦 マレー地方 シンガポール

生年月日 西暦2975年9月17日

職業 ア連地上軍第23師団及びMTO多目的上級航空部隊・無双隊所属パイロット

階級 准尉

血液型 AB型

瞳 マスカット

髪 オニクスブラック

専用機 1 / CW20 - U3C 無双・チェリーカスタムウイスタン

シンガポールの華人でア連軍の軍人。モルディブ条約が調印された後は各地の戦場に派遣され、目覚ましい成果を残したためエリート隊である無双隊に入隊した天才女性パイロット。無双隊の中でも若く、経験も乏しいため妹的キャラとして扱われているが本人は屈辱に感じている。

あいしんかくら
愛新覚羅 はくえい 白英

B a i y i n g A i x i n j u e l u o

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 アジア共和国連邦 東北地方 ハルビン 哈爾濱

生年月日 西暦2972年8月11日

職業 ア連宙域軍第9宙域方面師団及びMTO多目的上級航空部隊・無双隊所属パイロット

階級 中尉

血液型 O型

瞳 シルバーブルー

髪 ダークブラウン

専用機 1/CW20-U3e ウースラン ヴァイディ 無双 白帝

無双隊に所属する満州族の軍人。面倒見がよく無双隊の兄貴的存在。無重力条件下での戦闘を得意とし、専用機である無双の強化機体、無双・白帝は宙域戦用装備を通常より多く武装できる。

ムハンマド＝アイマン

M u h a m m a d A i m a n

種族 ホモ・エクシミアス

性別 男

出身 大バビロニア アラビア州 ハラド

生年月日 西暦2947年9月18日

職業 バビロニア軍第7師団及びMTO多目的上級航空部隊・無
双隊所属パイロット

階級 大佐

血液型 A型

専用機

1 / CW20 - U3d

無双ウーヌランデザートカスタム

北西バビロニアの治安維持を担当するバビロニア軍第6師団に所属しているアラブ系の軍人。王政主義グループ『ムルーク』の過激派との戦いで多くの功績を残した。かつてギアルシア軍に所属していた霧沢レイカとは知り合い。モルディブ条約調印後は無双隊の隊長として活躍している。

第一章 6 帰り道

無事番組収録を終えたガイアたち四人は着替えた後、片桐家に向かうために番組スタジオから最も近い第十六階層第四地区ターミナルステーションに移動した。ここで言うターミナルステーションとは軌道エレベーターの中継ステーションのことで、各階層はこのターミナルステーションを中心に公共交通機関のネットワークが広がっている。

『まもなく、玉兎行きの南方航空会社A738便が出発します。まだご搭乗されていないお客様は至急七番ゲートへお越しください。』
ステーション内部に入るとステーション独特の出発告知音声放送がBGMの様に建物全体に響く。

「レナたちはどのゲートに向かえばいいの？」

「ここはほとんど国際宇宙線用の宇宙船搭乗ゲートだから下降エレベーターの改札口を探さない」と

ギアルシア国土の八割を占める第五軌道エレベーター外縁都市群を構成する各階層の最もメジャーな移動方法は中央を貫く軌道エレベーターの利用。ギアルシア市民権を取得している者であれば無料で利用することが出来る。たとえ市民権取得者でなくても制軌道ステーションより下の大気圏内ステーションであれば一律150ギアルで利用出来る為、物質データ転送時に5ギアル/PBの転送税が掛かるサイバー空間より利用率が高い。

「ていうか俺たち全然違うところにいるかい？」

重そうなスーツケースを運ぶ小さな老婆や親戚を送り届ける家族を見ればガイアでなくても誰もが同じことを考えるだろう。

「そういえば大気圏エレベーターの乗り場は国際線から一番離れている場所にあつたような……」

ディアナが思い出したように一言。

「えー、最悪。お兄ちゃんどうにかしてよ!」

「俺に言うな。つーかお前ら二人とも三日に一度は十六階層に用事があるんだからそれくらい把握しろよ」

「だってギアルシアって複雑なんだもん。東京ならもっとサツパリしてて分かりやすいんだけどな」

「そうそう。ギアルシアなんて何年住んでも慣れないよ。ロンドンなんて迷子になる要素が全くないもん」

「それは故郷なんだから迷うわけねーだろ。どちらかというところ東京もロンドンも複雑な都市だと思うが。そうだろ、ロゼ？」

「ふおえ!？」

唐突な質問にロゼは変な声で狼狽える。

「どうしたんだ？」

「え？ いやー、なんでもないよ。ちょっと考えごととしてただけだから気にしないで」

「「あやしい」「

「はう!」

レナとディアナの邪眼の眼光を感じたロゼは縮こまる。

「で、どうしたのかしら？」

「親友なんだから教えてもいいでしょ？」

近くの柱までつれて行かれたロゼはディアナとレナに問いつめられる。

「いや、そのー。ステアと喧嘩しちゃってさ。どうしようか悩んでいたの」

「なるほど。でも珍しいね。仲良し姉弟なのに」

「そんなことないよディア。結構喧嘩するけど今回はいつもより酷くて」

「それでもレナは仲良し姉弟だと思うけどな。もちろんレナとお兄ちゃんのラブラブぶりにはかなわないけど。それで？ 原因はなんなの？」

「原因は昨日ステアとやってた『ドラゴンスレイヤー』っていうオンラインゲームなんだけど、ダンジョン攻略中に私が大嫌いな触手

系の敵が出てきて襲われたのにステアは無視して進んで行ったんだよ！ 酷いと思わない！？」

「触手？」

レナとディアナは同時に聞き返した。どうやら興味津々の様だ。

「そうだよ！ 触手だよ、触手！ あのヌルつとした感じ、思い出しただけで背中がゾクゾクしちゃう」

「ちよつとお兄ちゃん！ 今ロゼの話聞いているいる妄想したでしょ！」

「してねーよ！ むしろお前がしてただろ！」

「でも顔赤いじゃん」

否定できない自分が心の中にあつたガイアはそのまま沈黙する。

「ほらね。お兄ちゃんの変態」

「うるせえよ！ レナだつて妄想しただろ！ この変態娘！」

「はあ！？ レナは別に変態じゃないもん！ 女の子が女の子の妄想したところでなんの意味も無いし！」

「ちよつとレナ。公共の場で堂々と言い合いしないでよ。芸能人なんだから明日のニュースになっちゃうよ？」

気づけば四人の周りには人の輪が形成されていた。既にフォトニックスキャンカメラを起動させようとしている輩もいる。一瞬これが噂のパパラッチというやつなのか！とガイアは感動した。

「お兄ちゃんのせいなんだからね！」

「言ってる場合か！」

これはまずい。すぐに四人の考えが一致する。次にとるべき行動はただ一つ。

「逃げろ！」

四人は一目散にその場から逃げた。

「もー疲れちゃったよー」

レナは愚痴を漏らしながらゆらゆら帰り道を歩く。現在歩いているスカイストリートは約四度ほど傾いており、この微妙な傾斜が歩行者に疲労を与える。これはギアルシア市民を脱力させる政府の陰謀だとレナはいつも感じていた。

「いつもレナが言ってる政府の陰謀とやら、今なら信じれるな」
紙切れの様に歩くガイアはすさまじくレナに共感できた。

「二人とも情けないわね。家までもうすぐだというのに」

ディアナがだらけきった二人を励ます。

「ディアー、やっぱり今度からちゃんとタクシーで帰ろーよ」

「いつもタクシーが電脳空間使って楽しんでるんだからたまには運動しないとすぐ脂肪ついちゃうよ」

「そうなんだよねー。あーもー！ 帰ったらやけ食いしてやる！」

「だから太っちゃうからだめだつて」

「うー、ケチ！」

会話している間に一行はガイアとレナの自宅であるマンションの入り口に到着する。

マンションの名前はガリアシティ・ゴールドタウン駅前。桜関南東区の高級住宅街ゴールドタウンの駅から一直線に伸びるスカイストリートの端にそびえるギアルシア建設が設計した九階建ての高級マンション。円柱形の建物を中心にイチヨウ形の柱になった建物が周りに四棟ドッキングした構造で一室につき三階分与えられており、かなり広い造りとなっている。地下には室内プール、屋上には植物園まである。ガイアが暮らしている片桐家は701号室、東棟の七階から九階は全て片桐家となっている。ちなみにガイアは最上階の九階に自室を構えている。

「あ、そういえば今日はステアもいるんだつた……」

ロビーに入ったところでアラステアが自宅にいることをガイアは思い出した。

「本当に!？」

「……ああ、番組前に連絡があつて家のセキュリティに触ってたら自宅に入れなくなつたとか言つてた」

「もー！　なんで言つてくれなかつたの！？　ガイアの意地悪う！」

「そんなに怒るなつて。ロゼの気持ちが悪くまでステアはちゃんと俺の部屋から出さないから」

「約束だよ？」

「任せろ」

そう言いつつガイアはマンションのゲートロックを解除する。

「ガイアって監禁趣味あつたんだね」

エレベーター前まで移動するとディアナが唐突にガイアに聞いた。

「なぜそうなる！？？」

「だってステアを自室に閉じこめるんでしょ？　ディアはどう考えでも監禁だと思つけどな」

「男が男を監禁してどうするよ」

ガイアは少々呆れた様子だ。

「男同士で禁断の花園を築き上げる……、それしか無いわね！」

「無い無い」

「なに言つてるの！　BLほど情熱的な恋愛関係は無いのだよ、お兄ちゃん！」

「ちよつと、呼吸荒いぞレナ……」

エレベーターに全員乗つたことを確認してガイアは七階のパネルにタッチした。

「BLねえ……」

ステアのことを想像して見た目が美少女ならアリかと一瞬思ったがやはりガイアには抵抗があつた。

「ロゼはBLについてどう思う？」

「私？　うーん、ドキドキしちゃうかな」

「ていうか三人とも普段BLモノ見たりしてるのか？」

「当たり前じゃない！」

「当然よ！」

レナとディアナは勢いよく答える。

「私は普段は見えてないけど時々こっそりダウンロードすることがあるかも」

ロゼは恥ずかしそうに答えた。

「全くロゼはダメだなー。BLは全世界が薔薇色に染まるすばらしい文化なんだよ！ 恥ずかしがる必要なんて全くないんだからね。そこんところわかってる？」

「すみません、師匠」

なぜかロゼはレナに謝る。いつの間に師弟関係になってたんだと隣でツッコミを入れたくなったガイア。

「先に言うておくが俺はボーズラブに興味無いから。そこんところよろしく」

七階についたエレベーターから降りつつ、ガイアは宣言しておいた。

「えー、つまんなーい」

「生憎君たちの娯楽のために性癖を変えようとは思わないのでね」

「でもディアはガイアが男の人と抱き合う妄想止めないから」

「レナもお兄ちゃんがあんなコトやってる妄想止める気無いよ」

「じゃあ私も」

「もう勝手にしてくれ……。そもそも始まりは監禁だったのになぜBLまで発展した」

「じゃあ監禁に話戻す？ ガイアに監禁願望があるならディアは別につき合っただけよ。たとえ監禁されたとしてもガイアなら許してあげる」

「ずるい！ 私もガイアに監禁されたい！」

「やめやめ！ こういう変態トークは女子だけでしてる。悪いが俺に監禁趣味無いから」

「そうやってお兄ちゃんのことごとくレナたちの期待を裏切るんだ」「なんなんだよ。それじゃあ聞かせてもらおうがレスについてどう思う！？」 女の子同士でキスとかするんだぞ！ 同じ女として生理的

嫌悪は無いのか!？」

「全然アリでしょ」

「ディアは別に可愛い女の子とキスしても大丈夫だけど。ロゼやレナなら全然大丈夫!」

「私もレナとディアとならキスくらいどうってこと無いよ」

「……、そうですか。俺にはついていけません。どこか違う次元で幸せになってください」

くだらない話をしただけでディアはかなりの疲労感を感じていた。一方愚痴ばかりこぼしていたレナはB L トークが始まった頃からはなり元氣付いている。

「疲れたから早く飯食って風呂入って寝よ……」

独り言の様に告げてディアは早々と片桐家の玄関まで移動した。

「ただいまー」

ドアを開けるとビーフシチューの美味しそうなにおいに体が包まれた。

「お帰りなさいませ、ご主人様。お荷物お持ちしましょうか?」

「ありがとう、ワイン」

ディアは深紅の髪的美少女メイドに荷物を手渡すと靴を脱ぎ始めた。

「ディア、番組見たよ」

リビングからステアが登場した。

「よおステア。悪いが今すぐ俺の部屋に行ってくれないか? それと絶対俺の部屋から出るな。絶対だからな」

「うん、わかった。でもトイレに行きたくなったら?」

「それでも絶対出るな」

「えー!？」

「いいからさっさと行きやがれ!」

ディアの頑なな態度にステアは少々階段を上がってディアの部屋に向かう。その様子を見たワインは不思議そうに首を傾げる。

「ただいまー!」

「おじやましませーす!」「」

少し遅れてレナたちが玄関を開けて入ってきた。

「お帰りなさいませ」

ワインはすぐに三人の対応をする。ガイアはリビングに移動してソファアに座った。今晚これから起ころうとしていることを考えるとガイアの体は勝手にため息をついてしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5405m/>

Astral Record

2011年8月8日14時55分発行